292.2329
Ty997k
80W38506

292.2329
Ty997k
II

編譯彙報 第二十九編

海南島

中支建設資料整備委員會

国立国会図書館

汐M17

海南島

編譯彙報　第二十九編（昭和十五年八月）

中支建設資料整備委員會
（上海・興亞院華中連絡部內）

17.4.2

292.2329
Ty997k
II

55.8.30
商工省
圖書編纂書

80W38506

編譯彙報發刊の辭

曩に江南諸地に於ける支那側諸官衙・學校・圖書館等に所藏してあつた文化資料の類が、戰火の餘波を蒙りたるまゝ、徒らに放置・散佚されつゝあつた實情に鑑み、上海派遣軍特務部は、南滿洲鐵道株式會社上海事務所・東亞同文書院及び上海自然科學研究所の協力を要望し、昭和十二年十二月占領地區圖書文件接收委員會を組織して、これが接收・保管に當らしめた。同委員會は、硝煙未だ去らざるに挺身克く江南各地に赴き、困苦缺乏に耐へてこれら文化資料の接收保存に努め、南京に於いて接收せる圖書類だけでも大約六十萬册に及び、昭和十三年孟夏の節に到つて漸くその第一次假整理を終了した。その獻身以て崇高なる文化復興の基礎確立に貢獻したところ、誠に偉大である。次いで、同年八月末中支文化關係處理委員會の新設を見るや、占領地區圖書文件接收委員會は解散せられてその事業を繼承し、更に本格的整理が開始されたが、昭和十四年三月興亞院華中連絡部の新設せらるゝに際して、本會はその所管に入り、同年四月再び陣容を改めて中支建設資料整備委員會の成立を見、その間多大の成果を擧げつゝ今日に到つたのである。

而して、本事業の完成には今後尙ほ相當の日子を必要とするが、多數圖書文件中には、南京政權十

年の業績を窺ふべき册子も多く、支那の經濟一般・資源開發に資すべき好資料も亦鮮からず、いまや東亞新秩序の建設その緒に就かんとするに當面し、支那の經濟復興・開發に寄與すべき資料の甚だしく缺除せるに鑑み、これら資料類の急速なる利用方策を樹てむとし、中支建設資料整備事務所に編譯部を設けて、逐次飜譯出版することゝした。江南諸地に於ける現情勢は、尙ほ實體調査の圓滑なる進行を妨ぐるものあり、且つは支那事變前に於ける支那側諸機關の調査せる報告類にも信憑するに足るものありと雖も原文の儘にては之を利用し難く、而も經濟建設工作の根幹たるべき基礎資料の供給が、各方面から冀期せられあるので、斯かる急需に應ずべく差當り經濟建設に必要なる諸資料類約二萬頁の飜譯を計畫し、素材の儘急速に之を刊行する豫定である。尙ほ『編譯彙報』の內容は、經濟一般・農產物・鑛產物・交通及び水利等の各項に亘るが、之を分類編纂するの暇なきを以て諒とせられたい。

本書が、東亞新秩序建設の基礎的資料として、帝國の支那事變處理に些少なりとも貢獻するところあらば幸甚である。

昭和十四年十二月十八日

中支建設資料整備委員會
委員長　楠本實隆

解說

一、本編は、「海南島」及び「海南島に關する文獻目錄」の兩者から成る。

一、前者は、張維漢の著作になる『海南島』の飜譯にして、この册子は四六版五十四頁の非賣品パンフレット、民國二十六年七月五日の出版、發行地は單に海南島とあるも印刷所名その他を抹消しあり、表紙に「この書を外國人に借贈すべからず」と特記しある點から見て或は非合法的に刊行したるものならずやとも思惟される。その內容は、支那事變に先立ち、支那側の國防的觀點から海南島の重要性を說き、その防守計畫に重點を置き、特に日本をその假想敵として砲台の構築、鐵道の敷設、航空隊の配置等を詳述し、その論旨は稍々荒唐無稽なるも、現在海南島は日本軍の占領下にあり、諸政着々として進行の途にあるに鑑み、若干參考に資すべき點尠しとせず、且つ海南島の產業狀況に就き、森林・農業・鹽業・漁業・牧畜業・鑛業各項に關し略述あり、類似地域としての台灣との比較論あり、海南島の概要を窺知すべき好個の資料である。

一、後者は、この種文獻目錄の稀少なるに鑑み、滿鐵上海事務所資料室の調査になるそれを轉載收錄し、大方の攻究に資せんとした。

一、前者の飜譯は編譯部員周自在、校閱は部外へ委囑した。

昭和十五年八月十日

中支建設資料整備事務所長　清水董三

海南島

目次

第一編　海南島……張維漢……一
第一章　緒言……一
第二章　海南島の東洋に於ける重要性……二
第三章　海南島の軍事上の重要性……五
第四章　海南島の防守計畫……六
第五章　海南島の産業狀況……一六
第一節　林業……一六
第二節　農業……一七
第三節　鹽業……二四
第四節　漁業……二五
第五節　牧畜業……二六
第六節　鑛業……二七
第六章　黎人の開化……三三

第七章　海南島と台灣との比較論……三四
第八章　國民政府が爲すべき施設事項……三五
第九章　結　論……三七
第二編　海南島に關する文獻目錄……三八
例　言……三八
一、單行書冊……三九
二、雜誌所載資料……四〇
三、他書記載文獻目錄……四二

海南島

第一編　海南島

第一章　緒　言

孫文總理は、その著『實業計劃』に於いて「海南島は固より富源の地なれども、未開發の地なり」と言つてゐる。これに依つても、海南島の開發は、孫總理の早くからの意見であつた。けれども惜しいことには、革命以後政局大いに亂れ、內憂外患交々到り、孫總理の海南島開發の意思を實行するに到らなかつたことは、吾人の甚だ遺憾とするところである。筆者は民國十年の春、瓊崖（海南島）に職を奉じたる際、公務の餘暇に、この島の地形・要害・農村狀況を詳密に調査したことがある。最近日本人の北守南進說が、日增しに露骨になつたので、筆者は國難を憂ひ、こゝに固陋を顧みずその調査したものに、自己の意見を附してこの書を著し、以て同胞諸賢に獻ずる次第である。書中には國防計畫を最も詳細に述べたが、蓋し海南島の西南地方半壁の安危は本島の得失に係はるので、國防がなければ即ち建設はない。この點緩急輕重に依つて事宜を審かにすべきところである。唯筆者は學識淺薄にして正鵠を期し難く國內の軍事學者・經濟學者が進んで御教示せられんことを懇願する次第である。

中華民國二十六年六月二十二日　　香港の假寓にて　　張維漢

海南島は支那最南部の海中に孤懸する領土である。全島の總面積は約九萬七千二百方支里で、台灣とほゞ同面積で

ある。その地勢を述ぶれば、西は安南に接し、北は雷州を隔て、東はフイリツピンを望み、南に南洋群島を控へてゐる。歐米人は嘗つて海南島と台灣を稱して支那にとつては二個の眼球であると言つたが、これに依つてもその地位の重要さを知ることが出來る。海南島は熱帶に近く雨量充分なるが故に農產物は豐かにして、護謨・椰子・咖啡・檳榔等の如きは海南島の特產物で、國內には何處にも出來ないものばかりである。護謨は更に軍事上の必需品である。支那の面積は廣いと雖も、未だ護謨を栽培せる土地はなく、僅かに海南島一個所あるのみである。恰も國際風雲緊急の秋に當り、この地理的關係上重要なる海南島を、どうして輕視する事が出來やうか！

海南島は海中に孤懸し、從來支那人はこれを重要視せず、歷代の政治家は見識淺く、常に海南島を瘴雨蠻煙、荒蕪不毛の地となしてゐた。かゝる錯誤した見解は民國の時代になつても、尙ほ覺醒されなかつた。海南島の地位は、國防上・經濟上支那の生命線の第一線を爲して居り、また氣候溫和・土地肥沃で、豐富な礦產・林產があるが總て放棄されてゐる。爲に强隣邦は虎視耽々として、已に早くからこれに垂涎してゐるが、今尙ほ能く巍然として、海南島が存在することは僥倖と云ふべきである。若も更に姑息苟安して居ると、强隣邦に撲取せらるゝに至り、則ち支那の南部の要害は全部失はれ、敵は容易に廣東・廣西・雲南・貴州等へ長驅侵入し得られ、これ等の諸省は恐らく我が有でなくなるであらう。今幸に宋子文氏は廣東當局と、その關係の重大を知り、特に飛行機を藉りて海南島を視察し、支那人をしてこの隱れた海南島に視線を集中せしめた。但し海南島に於いて國防上・經濟上、如何に建設すべきかが研究されてゐない。吾人はその詳細を研究し、支那人をしてこの島に對し、一步進んだ認識を抱かしめたいと思ふ。

第二章　海南島の東洋に於ける重要性

海南島の太平洋に於ける重要性を明かにせんとするには、須らく先づ南洋群島の國際關係を明かにせねばならない。

即ち南洋群島が擁する土地の面積は二百萬方粁、人口七千四百萬人、また未開發の天然資源は八十%を有すると言ふ。因つて移民、資源開發、貿易の投資及び國防施設等に於いて列國が競爭してゐるのである。南洋には表南洋及び裏南洋がある。表南洋はスマトラ・馬來・ボルネオ・セレベス及びフイリツピンの諸群島を包括してゐる。國防と經濟の兩方面から言へば、支・英・米・日・佛・和等の諸國は、均しくこれに關係を有してゐる。裏南洋はマリアナ・マーシヤル・パラオ及びカロリン各群島を包括し、日本が「第二の生命線」と稱してゐる。これ等の小島は經濟上の價値はないが、然し日米間の國防關係に於いては、非常に重要なものである。米國が布哇・ミツドウエイ・グアム島を經由してフイリツピンに通ずる一線路と、日本が小笠原群島を經由してマーシヤル・カロリン・マリアナ等の委任統治諸島に通ずる區域は、三叉路の形をなしてゐる。これらの小島は海上縱千餘哩、橫千五百餘哩に、星座の如く散在し全部で六百二十三島である。形は丁字をなし、丁字の西側はフイリツピン群島を離れること五百哩、丁字の東側は布哇島のホノルルを離れること二千哩、米國自體が布哇島へ往くよりは近く、これらの諸群島は滄海の一粟の如くであるが、併し各島には珊瑚礁が出來るし、天然の良港も少くないので海軍根據地となつてゐる。日本人は已に距離五百哩毎に一海軍根據地を建設し、その上各要所には砲台及び飛行場を設けて攻勢をとり、何時たりとも布哇及びフイリツピン群島を脅威し得るのである。故に日本は太平洋西北部二千五百哩以內に於いて、米國艦隊の南洋に赴く事を制壓し得るのである。これらの小島は既に米國とフイリツピンの海上に遮へぎられて、赤道以南の道を繞つて目的地のオーストラリアに至り得るのである。但し航路は一萬一千哩もあつて困難を免れない。フイリツピンは孤立に陷り放棄さるべき態勢にある。日本の第二海上生命線が完成したと云はれるのは、即ちこれを指すのである。これは僅かに裏南洋に於ける日米間の國際對立關係の基礎をなしてゐるのであるが、米國が若し海南島を占領すれば形勢は異つて來る。即ち米國は資本國であつて大いに軍艦・飛行機工場・船渠・砲台等を多量に建設して、この海南島を防守し

竝に銃器・彈藥・食料等多數に貯へ、戰時にはフイリツピン群島と相呼應し以て日本の艦隊を制禦するのである。則ち日本がこれに對抗するに容易ならぬ精力を費すであらう。日本が南洋に進出したのを歐洲大戰後に始つたので、即ち舊獨逸領の諸島を委任統治した後である。日本は南洋の海軍根據地を占領し序に野心を起して、經濟上の價値なき裏南洋の群島を國防上の生命線と稱して獨り顏をしてゐる。英・米・佛・和の諸國は、この地への日本の貿易躍進に對して、輸入稅を引上げ障壁となし、日本商品の表南洋に搬出することを阻止してゐるので、日本は表南洋群島に一根據地に依つて發展の止むなきに至つてゐるのである。印度支那及び印度群島を包括する英・米・佛は、何れも强國であり、その屬地は容易に奪取することが出來ない。和蘭は小國であるが東印度群島の防備は已に一切を英國に委託してゐる。依つて諸國が强制的に土地を占領して、表南洋へ進出する根據地を作ることは不可能になつてゐるので遂に軟弱な支那に向つて海南島の奪取を謀り、以てその軍略上の完成を期するのである。海南島は廣東・廣西・雲南・貴州の生命であるが故に、南支數省及び佛蘭西領に屬する安南の障屏とも稱せられるのである。更に台灣と澎湖島とが一氣に聯絡が出來て、太平洋上に於ける長城の如く、英國に對しては新嘉坡と香港間の軍事聯絡を切斷することが出來、進んでこれを奪取せば、佛蘭西に對しても廣州灣・海防・西貢・堤沙淺洲群島との聯繫を破壞することが出來る。米國に對してはフイリツピンを攻擊してこれを占領することが出來るのである。海南島は歐亞交通の重要の門戸で航路は四通八達してゐるので、如何なる國でもこれを得れば、南支那海の航海權を制壓するに足りる。日本は固よりこの島を望み、以て侵略及び經濟生命線の基礎を作り、所謂「第三の海洋上の生命線」とせんとしてゐる。無論何れの國も等しくこの島を占領することを望んでゐる。否また、それが出來なければ野心なき我が支那がこれを持つことを希望し、而して侵略國の手に落ちることを望まず、東亞の平和に及ぼす危險を避けんことを望んでゐる。凡そ海南島の得失は、全く吾人の建設及び外交手段の如何に依るのであるから、若し支那が早く善處しなければ、滿洲のあとを追ひこの地の將來は容易に豫測されるのである。

第三章　海南島の軍事上の重要性

海南島は海上に孤懸し、雷州半島を距たること約十二哩、敵が若し海軍に依つて先づこの島を侵略せば、敵は飛行場を擴張し銃器・彈藥を貯へて侵略の根據地にするであらう。陸海空軍ともに沿海を襲擊し、更にこの短距離の海峽を渡つて雷州半島を占領し、進んで廣東・廣西・雲南・貴州の諸省を攻めるが、斯くの如き場合に支那の生命線はたちどころに切斷されて、戰爭の大局は遂に終結を告げ、その結果は屈服するのみである。生命線とは戰時用の物資を支那に於いて自給し得ず、外國より輸入する物資の通過道路即ちこれである。支那は現在工業國に非ず、農を以て國を立てると自稱してゐるが、その農產物も亦外國人より供給を仰ぎつゝあるが、戰時の需要となればまた多大なものである。一生命線をも維持出來ないから戰爭は戰はずして敗けるのは勿論である。現在支那の重要地は北部では天津、中部では上海、南部では廣東である。この三港は即ち支那の生命線をなしてゐるのであるが、天津は名のみで、上海は海濱に近いので、戰時は必ず敵の封鎖を受けるので、重要地を奥地に求めなければならない。その奥地で隣國と接續してゐる土地は幾個所もある。即ち北支交通路の隴海鐵道の西端は、甘肅・新疆の自動車路と接續して、ソヴエート聯邦のトルキスタン鐵道に通じてゐる。貨物自動車を以て支那の需要品を運輸することが出來るが、この道は非常に遠くて、戰時多量の需要品の運輸には障礙が生ずるので、萬やむを得ざる時に非ざれば使用は出來ない。南方に京滬國道があり、現在已に完成し、物資は英國領のビルマ及び佛領安南を經由して輸入される。若し廣東を失へば、敵は必ず西方の雲南・廣西へ侵入してこの線路の切斷を企てる。故にこの線路を維持しやうとするには、必ず廣東を保守すべきである。本省は近くにある九龍・澳門・廣州灣等と陸續きにて、大いに廣九・粵漢等の鐵道及び駿奥線の

自動車路を利用して、全國に需要品を運搬することができるのである。遠くは廣西と連絡し、佛領の海防より廣西の鍾南關に通ずることが出來、また海防より滇越鐵道を利用し、雲南省昆明に至ることが出來る。若しも滇緬國道が早く完成すれば、更にラングーンを利用することが出來る。この地はマラツカ灣中にあり、西は印度に望み、東はビルマに屬すれば、敵は海洋上に根據地を有せず、こゝに來ることが出來ない。吾人は粵漢鐵道を南北交通の總幹線とし、公路を以て補助線路とすべきであると思ふ。敵は天津及び上海を封鎖しても、全く支那を閉塞したことにならない。從つて我が生命線は廣東より蜿蜒として西、邕寧を經て更に西へ向つて昆明に入り得るのである。故に現在の廣東・廣西・雲南諸省を直通する公路は、迅速に完成する必要がある。海南島は支那に於けるたゞ一つの椰子及び護謨の生産地であり、その他豐富の鑛産物があり、これ等は皆軍需工業の必需品である。若し更に積極的に開發を行へば、また食料としての必需品である鹽・米等も多量に産するのであつて、他省を救濟することが出來る。これに依つて觀るに支那を保守しやうとするならば、必ず廣東を保守し、廣東を保守しやうとするならば、必ず雷州半島を保守し、雷州半島を保守しやうとするならば、必ず海南島を保守しなければならない運命にある。嗚呼！世界の風雲は日々急を告げ、民族生存の戰は目前に迫つてゐる。その勝敗は國家の損失のみならず、その利害は全國民に影響するので、吾人は國民として責任を他に忌避することなく、只現在のみの安全に醉つて安閑としてゐられないのであつて、嚴然と態度を改め、山河の亡びんとするを愛護する爲に、醉生夢死の巷に沈むことなき樣警告を與ふると共に、吾人は支那の建設に努力せんとするものである。

第四章　海南島の防守計畫

海南島は海洋の孤島で大陸と離れてゐるので、國防建設が未だ十分に完備せざる間は、例へ强大の陸軍を有すると雖、必ず防守に堪へないのである。敵は優勢な海軍を有し、連續的にこれを襲擊すれば、支那の生命線は切斷され、救助の方法なく最後に屈服あるのみである。若し海軍を訓練して驅逐艦を領海の外に置けば、防守し得るとしても時間及び經濟の許さゞる所にして、現在の支那の海軍力ではこの島を守ることは不可能で、敵と兵力を比較する價値がないことは甚だ明瞭である。若し砲台を築いて島に繞らし、敵艦に對抗せんとするも、海南島をめぐる海岸線は約二千餘支里もあつて、これを築くことが出來ない。支那の經濟力程貧乏な國はないからである。最善の方法としては、筆者が民國二十二年軍事委員會へ提出した海南島施行計畫案に依るべきである。筆者は世界大戰後、獨逸が條約に依る制限を受けつゝある狀態を見るに、即ち獨逸には巨大な軍艦建造を許さなかつたが、獨逸は袖珍軍艦を建造して、條約の制限を遁れた。その威力は大軍艦と少しも變らないのであるが、各國はこれを知つてゐてもどうすることも出來なかつた。支那は辛丑條約の制限を受けて、大沽口に砲台の建築を許されないのであるが、獨逸の例に倣つてこの條約を遁れる方法として、支那は移動砲台を建築して北支の要害を保守すべきであると思ふ。移動砲台とは列車砲の事であつて、短距離の鐵道二線を敷設し一本は北寧鐵道に接し、一本は平津鐵道に接して何れも大沽を繞らして行くのである。即ち平時は交通器具として使用し、防禦守備の必要ある時は直ちに列車砲を出動して大沽を守る。斯くすれば平津の安全なることは泰山の如く、この方法はまた條約違反にも非ず、即ち鐵道交通器具にして、砲台ではないから制限を受けない。辛丑條約の時支那の署名に當り、各國は軍隊を支那の土地から退かしむるを署名の交換條件としてゐたが、今や敵は國境に集結し、已に未だ署名條約前の狀態に復してゐる。敵は辛丑條約を撤退せば、支那はその列車砲を作ることは何でもないことである。況んや砲台に非ざる列車砲とは巨大なる加農砲を鐵道車輛上に裝置して、隨時隨所へ自由射擊が出來、レールを利用して敏捷に馳驅し、循環游擊神出鬼沒、且つ能く大砲の威力を發揮し、新式の各中型小型の大砲に比べて、更に優れたる威力あるに於いておやである。現在世界中で最大の列車砲を持つ

てゐるのは米國で、直徑十四吋、着彈距離二十五哩といふ巨大なもので、軍艦の大砲の着彈距離は二十三哩半であるが、それよりも優れてゐる。米國はこの大砲二門を太平洋西岸に裝置して、米國最大の弱點であるパナマ運河を保護してゐる。惜しい哉支那には未だこの種の大砲建造が、完成してゐない。故に敵は已に國境を壓迫し、平津を虎視眈々として窺ひつゝあるのであるが、若し大砲の施設が完成すればこの砲台に依つて關外へ擊退することが出來る。滿洲には鐵道が四通八達してゐるから、砲車は自由に運轉せられ支那は敵國を脅威し、これに抵抗する方法をなからしめ、滿洲を難なく回收することが出來る。今海南島にもこの方法で鐵道を海岸に敷き繞らし、大砲を購入して敷設し、平時は交通の用具に充ていざ戰爭となれば、武裝車とすれば如何なる方向より攻擊されても支那はこれ等の武器を利用して對抗し、或は集中射擊に、或は欺彈に、自由に射擊することが出來る。實に海南島防守の最優良の武器である。然し環島鐵道を敷設するならば、その方法では不可能であつて、徒らに敵艦の砲擊、飛行機の爆擊を受くるのみであるから、敷設する時は目標とならないやう注意せねばならない。

然れども鐵道敷設の完成には、少くとも二三年を要する。しかも第二回の大戰は最近に勃發する模樣で、放置すれば危急の際に間に合はない。且つ敵は海南島を第三の生命線と稱してゐるのであつて、廣東・廣西を作戰根據地とすることを、大陸政策を完成する捷徑としてゐる。敵は表南洋の海軍根據地の爭覇戰を以て南進政策をなし、所謂「北守南進政策」の下に、兵力を集中して必ず取るの勢である。北海事件發生後、ある敵の少壯軍人は曾て海軍及び外務當局に「日本は何故海南島を根據地に占據しないか」と質問したのに對し、「早くから已に考慮中にあり」と答へたと云ふ。所謂考慮中とは支那の抵抗を恐れてゐないものであつて、今日この島の設備は尙ほ充分に完成せず、敵はこれを取るのに何の難作もないのである。一八九七年支那と佛蘭西が結んだ條約には「海南島は他國へ割讓しない」と決めたが、敵はこの條約を慣れないのみか、佛蘭西と支那とが結んだ條約を直ちに破壞し、英・米・佛等の抗議をも

恐れないのである。要するに抗議は紙上の空文で、紙上の文章で大盜賊を制止することは出來ないのである。占領後英・米・佛の諸國が武力を以て日本を制止し得るか否やは疑問である。日本は現在海南島を占領したいと考へてゐるが、その形勢は斷じて滿洲を占領したやうに容易ではない。抑も英・米・佛等が單獨で干渉して來るか、聯合して干渉して來るか日本ではこれを問題にしてゐるので、日本でも現在の處尙ほ見透しがつかないのである。所謂「尙ほ考慮中」であるとは即ちこれである。前に日本が滿洲を侵略したことは、ソヴェート聯邦の固より希望する處ではない。各國も亦自國の問題が尙ほ解決しなかつたので、支那にまで及んで抗戰する準備はしなかつたので、この機會に乘じて日本は滿洲を占領したのである。英・米・佛諸國が海南島を重視してゐるのは固より自國の利益の爲であつて、根本的に支那に代つてこの島を守るべき義務や責任をもたないので關係は頗る薄弱である。現に世界の風雲は千變萬化してをり、將來列强自身が海南島を顧みるに暇がない危機に遭遇するやうな時があれば、この島の運命は最期を告げるより外ないのであつて、西南諸省も亦危急存亡に遭ふのである。敵國が若し海南島を占領せば、各處に要塞を築き、更に軍艦を派して瓊州海峽を保守するであらう。斯くなつた時に支那がこの島の回收を欲することは、現在滿洲を回收するよりも一層困難な情狀に陷るのである。蓋し陸地であれば、陸空軍を相當な期間を費して訓練すれば、たやすく進出せしめらるゝが、海南島は乃ち島に屬し、海岸を攻擊するには先づ艦隊が必要であるが、支那には優秀の海軍もなく、若し今より海軍を訓練して敵に對抗することは、恰も天に登るより困難である。吾人は敵が現在考慮する間に於いて、最短時期（約六個月）に防守工作を完成し、敵をして占領の機會なからしめんことを計るものである。

日人石丸藤太はかく言ふ「海南島が廣東・廣西に對する位置は、廣東・廣西を若し輕氣球の氣囊と假定すれば、海南島は丁度吊籠で、中間の雷州半島は氣球の頸部即ち吊籠の綱であつて、氣球は恰も吊籠に依つて操縱してゐるやうに、若しも海南島を根據地とすることが出來れば、廣東・廣西は自ら支配することが出來るのである」と。吾人はこ

〻に一つの氣球と吊籠を一息に作り上げる事が出來るのである。二者を分離せず一體となし、吊籠（卽ち海南島）と氣球の頸部（卽ち雷州半島）とを連ぬれば、敵は操縱する方法がないのである。雷州半島と海南島と相距つること僅かに十二哩にして、また木欄頭の要害がある。近代科學の進歩で、米國製口徑十四吋の加農砲は着彈距離二十五哩、口徑十六吋の防海砲は着彈最遠距離二十八・四哩だから、その砲彈は如何なる軍艦の甲殼をも擊ち拔くことが出來る。普通軍艦の大砲の着彈距離は僅か二十三哩半である。若し雷州半島の博平灣、那黃港及び海南島北部の舖前・石礮港等の地にこの種の大砲を一、二門置き、別に口徑八吋或は口徑十二吋の大砲數門を補ひ、竝に水雷等を敷設し瓊州海峽を保守して、敵艦の通過を阻止すれば、戰時には支那は海口及び海安間の交通を維持することが出來るのであつて、卽ちこれを海南島の生命線とする。生命線が保持出來れば支那は容易に安定することが出來る。雷州と海南島とは一つは半島をなし一つは島である。敵は直に到る處を攻擊して上陸せんとした場合、正面から我を攻擊して陷落しない時は、必ずその海軍陸戰隊を用ひて、側面或は後方から攻擊するであらう。支那は各砲台の後方に堅固な防禦工事を築き、新式の砲壘・塹壕等で各砲台を繞し、相當數の兵力を駐在せしめ、多量の食料品・彈藥等を貯へ以て防守すべきである。卽ちこれを軍事區となし、更に各路軍を集めて外から攻擊し來る敵を殲滅すべきである。斯くの如き場合士氣、地利、救援、兵力の點に於いて敵は支那に劣り、しかも遠途の襲來である。支那がこれに對し直に防禦の陣を張つたならば、上陸の道は必ず遮斷されるのである。遂溪・海康・徐聞等の諸縣の公路は四通八達してゐるから、支那は各公路を利用して海南島を救援することが出來、敵が上陸するところを殲滅するのである。高州・雷州は佛蘭西の租借地廣州灣に接近してゐるので、佛蘭西が支那を助けることは固より當然であるが、中立地帶でも敵は强制的に上陸する（敵は胥島を攻擊の時、强制的に支那の領土に上陸して獨逸を攻擊した）であらう。敵が虛に乘じて斯く上陸することは、支那には重大不利である。故に凡て租借地と接近する處は、宜しく豫め防禦工事を以て萬一の際に備へる計畫を建てねばならぬ。これが海南島北部及び雷州半島の軍事區建設の大略の情況である。

海南島の南部に榆林港がある。鐵墟港及び三亞港の二港の間にあり、港内は東西約三支里半、南北約一支里、水の深さは二丈乃至五丈で、巨艦數艘を容るゝことが出來、海南島にとつて最も重要な港である。歐洲から東へ航行するものにとつては重要な門戸にして、また國防上最も價値ある軍港として日露戰役の時、露西亞は曾てバルチツク艦隊をこゝに駐めたのであつた。この港には一軍事區を設け、東は陵水の新村港より崖縣の保安港まで、その範圍を廣め砲台は一個所では不足であるから二三個所を築いて防守する。

三亞・榆林・新村・杜仔等の一帶は、海南島の重要產鹽地である。鹽は食料の必需品で鹽なくして人間は生きられない。鹽の種類には海鹽・池鹽・井鹽・鹼鹽・礦鹽の五種あるが、人民の多くは海鹽を食してゐる。戰時敵は必ず軍艦を以て沿海の鹽田を攻擊して、支那の食料を制するのであらう。宜しく速かに國防費を增して、多數の遠距離射擊砲・潛水艦及び爆擊機等を製造して、敵艦をして恐れ近よらしめざるやうにすべきである。竝に附近鹽田を開發し、戰時の鹽饑饉を救濟しなければならない。斯くの如く一方では要塞を護り、一方では能く漁・鹽等の重要食糧品を護るは、實に一舉兩得と云はねばならない。西方は儋縣の新英港を以て軍事區とする。この港は西部に於ける重要港で、その深さは十尺乃至四十尺、面積廣濶、千噸級の汽船も容易に出入が出來、また主要の製鹽地である。東方にある文昌縣の淸瀾港及び樂會縣の博鰲港にも、各々一軍事區を設ける必要がある。卽ちこれ等の港は水が深く、巨艦の出入自由にして、富源の地に近いから敵に破壞されてはならない。これらの軍事區が既に定まれば、前に砲台あり、後に防禦工事あり、敵が上陸せんとすれば、また各路軍の襲擊を受けるのである。以上は吾人が敷設した陣地の大略である。

交通は軍略と重大な關係がある。現在の道路は多くは海岸を繞つてゐるので、敵は軍艦よりその道路の一二個所を砲擊すれば、支那はその道路を通過する方法がなくなる。この時には應急手當がないので、陸上の交通線路は軍事上

急速に完成する必要がある。經濟的にも或は時間的節約から云つても、海南島の既成公路の約八千五百支里は、軍事區を一貫して通ぜしむる必要がある。附圖の如く築道すれば更に効果がある。尙ほ海口より楡林に至るを甲線、嘉積より新英港に至るを乙線、嘉積より楡林に至るを丙線、新英港より楡林に至るを丁線として、三角形をなしてゐる。嘉積に防禦守備を要する場合は、即ち楡林の兵は丙線に依つて運ばれ、新英の兵は乙線に依つて運ばれる。海口の兵は甲乙兩線路に依つて運ばれ、如何なる所に防禦守備を要する時も、各路の兵隊は直に應援に赴くことが出來る。これを稱して三角循環交通總線と云ふ。三角形の角度の附近毎に兵營・兵器火藥庫・食料倉庫・車庫・病院・ガソリン倉庫等を建てゝ、各軍事區の救援に便ならしめる。更に廣大な土地を探して飛行場を設け、多數の飛行機を貯へて海南島防守の用に備へ、平時はこれらの線路を交通の用にあてゝ、黎民の開發用途とする。これ等の公路は黎民の同意を得なければ工事に着手することは出來ないので、宜しく各區に分けて各酋長を感化し、黎民に工作を命じ、これを督率することにすれば、有利である。止むを得ざる場合に非ざれば、武力を以て彼等を壓迫することは不利である。尙ほ各縣に於ける囚人中の健全な者を選拔してこれを助けしめ、工作に功を樹てた者には刑期を減じて勞作を奬勵し、不足の場合は工夫を募集して、完成を急がしめる。路は山川の自然の障害を受けるので、この場合これを避けるを爲に技師を同行して、附近の土地の情況を測量する。これが公路計畫の大略である。期間は前述の通り國際間の風雲緊急の際、戰亂が勃發すれば直に海南島は占領される危險性がある。故に防守工作には緩慢を容れないものがあり、最短期間にこれを完成する必要がある。砲台の構築や、防禦工事の鐵類は、陸路購入が出來、人夫は現地で募集し、セメントは廣東省より供給するので、先づ技師・軍事專門家及び測量隊等を派遣し、砲台・防禦工事・兵營・銃器彈藥庫等の位置及び建築方法を測量せしめ、砲台の部分は砲身の配置を適當にして、大砲が運搬さるればすぐ構築出來る樣にしておくことは勿論、その他の各部分も計畫通り着工して約四個月乃至六個月で完成せしめる。これ等の工作

の遲速如何は、實際人夫の數及び指揮の方法等に依るもので、迅速なる完成は絕對不可能ではない。同時に各國へ專門家を派遣して、最近發明の口徑大きく射程距離の最も遠い大砲若干門を購入するか注文しておくことである。この大砲を主力砲とし、別に十二吋徑或は八吋徑の海岸砲若干門を購入して補助砲とし、破壞力の大きく射程距離の遠いものを以て原則とする。その他機械化の大砲數門（牽引車で運行するもの）を購入することも有益で、これらの大砲は全島に亘つて運行することが出來るので、緊急の場合は何處にでも運行して敵に應ずる便があり、砲台の防守を助け、また上陸する敵軍を攻擊すことも出來るのである。一方多數の戰鬪機及び爆擊機を購入して、砲台の防守をなすことに注意せねばならない。最近軍艦の建造費は極めて騰貴し、三萬五千噸級主力艦一艘の建造費は七百萬磅、支那國幣約四千萬元に當るが、飛行機を以てこれを爆擊すれば容易に擊沈せしむることが出來るので、高射砲で射擊しても、飛行機の目標は小さく行動が速くて命中し難い。最近獨逸の軍艦はスペインの飛行機の襲擊を受けて、大破されたと聞く。爆擊機及び照明飛行機が隊を組んで同時に一、二隻の軍艦に向つて爆擊した場合、たとへ數機擊墜されても、九牛の一毛に過ぎないので、敵艦は我が數彈の命中に依つて必ず沈沒し、その價額と生命の大きな損失は我々に比べて十倍に當る。故に支那は急速に全力を揚げて空軍を擴充せねばならないのである。彼が海軍を以て雄と稱するなら、我は空軍を以て覇を稱へ、失地を回收して島國を擊ち平げて以て過去の仇を取りかへすべきである。新聞掲載に據れば、一九三五年より一九四〇年までの敵の陸軍航空隊の五個年擴張計畫の支出額は、二億圓であると言はれるが、支那の空軍擴充計畫は、最小に見て倍は必要でその力量は敵に倍することを原則とすべきである。現在敵は多大の財力を建艦競爭に費してゐるから、必ず競爭が出來ないであらう。故に飛行機の建造には全力を注ぐべきである。彼は島國のことであるから海軍を放棄することは出來ないのであつて、海軍と空軍の經費を同時に增加せんとすれば、また經濟的に限りがあつて、經濟力の許される所ではないのである。故にこの際海南島全土を防守しやうとする

には、多數の飛行機を建造するに非ざれば防守出來ない。その他潛水艦・高射砲・無線電信・トラック・タンク車・探照燈等の如き種々の新鋭武器は、適宜備へるべきである。以上各種の武器及びは特種の火砲を注文する外、現品で買へるものは直に購ひ、直に發送させば、遲くとも三個月で到着する。武器が到着したならば、支那の防守工作はほゞ備はるのである。豫算額約一億五千萬元の内、一億元を以て武器を備へ、一千萬元を以て防禦工事を構築し、四千萬元を以て海南島の實業開發をなすのである。これ等の金額は支那では多いやうであるが、外國に比較すると實に十分の一である。佛蘭西のマヂノ線の如きは、砲台防禦費國幣約十二億元にも達してゐるが、尙ほ未だ十分に完成してゐない。英國のシンガポール軍港はまた二千萬磅を費した。香港は一小島であるが、民國二十六年六月二十四日の國華報に據れば、「英國政府の香港に對する防衛軍事費は本年四千萬元、一九三八年にまた別に四千萬元を增加し、今後五個年間にその防衛軍事費約一億二千萬元にする」と云ふ。最近また七千萬磅を準備して艦隊を建造し、專ら英領の南洋群島を防守するに用ひてゐる。故に今支那の海南島防守に用ふる費用は、必ずしも巨額ではないのであつて、各種武器が騰貴してゐる關係もある。これ等の費用は生産の爲に非ざるも、國防設備がなければ生存しないのであるから、千萬金の犧牲をも忍ばなければならないのである。一國は家庭の如く要塞は家庭の門戸である。世には門戸のない家庭はなく、凡ての家屋を建築するには、先づ堅固な門戸を建てるのである。さうでなければ徒に盜賊の襲來に委すのみである。

國に防守の設備がなかつたならば、工場が如何に發達してゐても、鐵道が如何に四通發達してゐても、建築物が如何に美麗であつても、城市が如何に繁榮であつても、農村が如何に發達してゐやうとも、總て他人に代つて建設したに過ぎないのであつて、徒に敵の利用に供給するのみである。支那が滿洲を未だ失はなかつた以前には、兵工廠・鐵道・鑛山等を所有して價額は總計幾億元であつたかしれなかつたが、國防の設備なく何等抵抗し得なかつたので數日で悉く敵のものになつたことは、どうしても惜しくてならない。國防もなく建設もなかつたならば、敵の慾望を起さしめなかつたかも知れない。

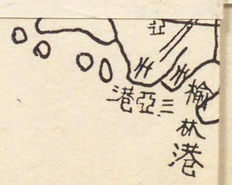
海南島を得るのと海南島を失ふのとは、その利害の差は多大なものである。海南島の領土を守るとするならば、小區域であるから、小區域の設備でよく、決して難しい事ではない。支那の現役兵は約二百五十萬人であるが、これ等の軍隊は皆機械化してゐないのであつて、統一しない前は、各々兵を集めて自分の地盤を强固にし、屢々國内を擾亂してゐたが、外國に對しては抗戰する力がなかつた。今や全國を統一し徵兵制度も已に實行されてゐるので、二十萬人を減ぜば、毎年約七千萬元の經費が浮び上つて來るのである。若し百萬人を減ずるとすれば、毎年三億五千萬元をあげることが出來るのである。假に海南島防備の爲めに一億元の武器を購入して、これを五個年に分けて償還するならば、即ち毎年二千萬元を支拂ふ事になる。その剩餘の三億三千萬元で新鋭武器を購入して各處を防守し、これまでの失地を回復するに用ふるのである。假想敵國の軍備如何を見て不足であれば增加すればよいのである。斯くすれば支那の經濟には影響を與へなくて、機械を購入し海南島を防備する爲に借款するならば、英・米或は佛蘭西でも必ず喜んで支那を援助するであらう。海南島の世界各國に對する重要性は前にも述べた如く、如何なる國もこの島を支那から敵國の手に失つて行くことを惜まない國はないのである。海南島を敵の南進政策の海軍根據地に提供することは、各國領土の安全を脅かし、これまでの商業上の發展に惡影響を及ぼし、將來太平洋上の平和を亂し、而して東洋の平和を擾亂することゝなるのである。支那が現在の海南島を固く守つて、侵略的野心を抱かず東洋の平和を亂す思想がなく、敵に抵抗する爲に防備を設けることは、間接に各國領土の防備を帮助してゐるのである。この事情を各國に要人を派遣し利害關係を述べしむれば、各國は自國の爲に必ず喜んで優秀の武器を與へ人物を派して、支那を助けることは信じて疑はない。また次に雷州半島と海南島とは國防上の重要地點であつて、兩島は全く不可分の狀勢にあ

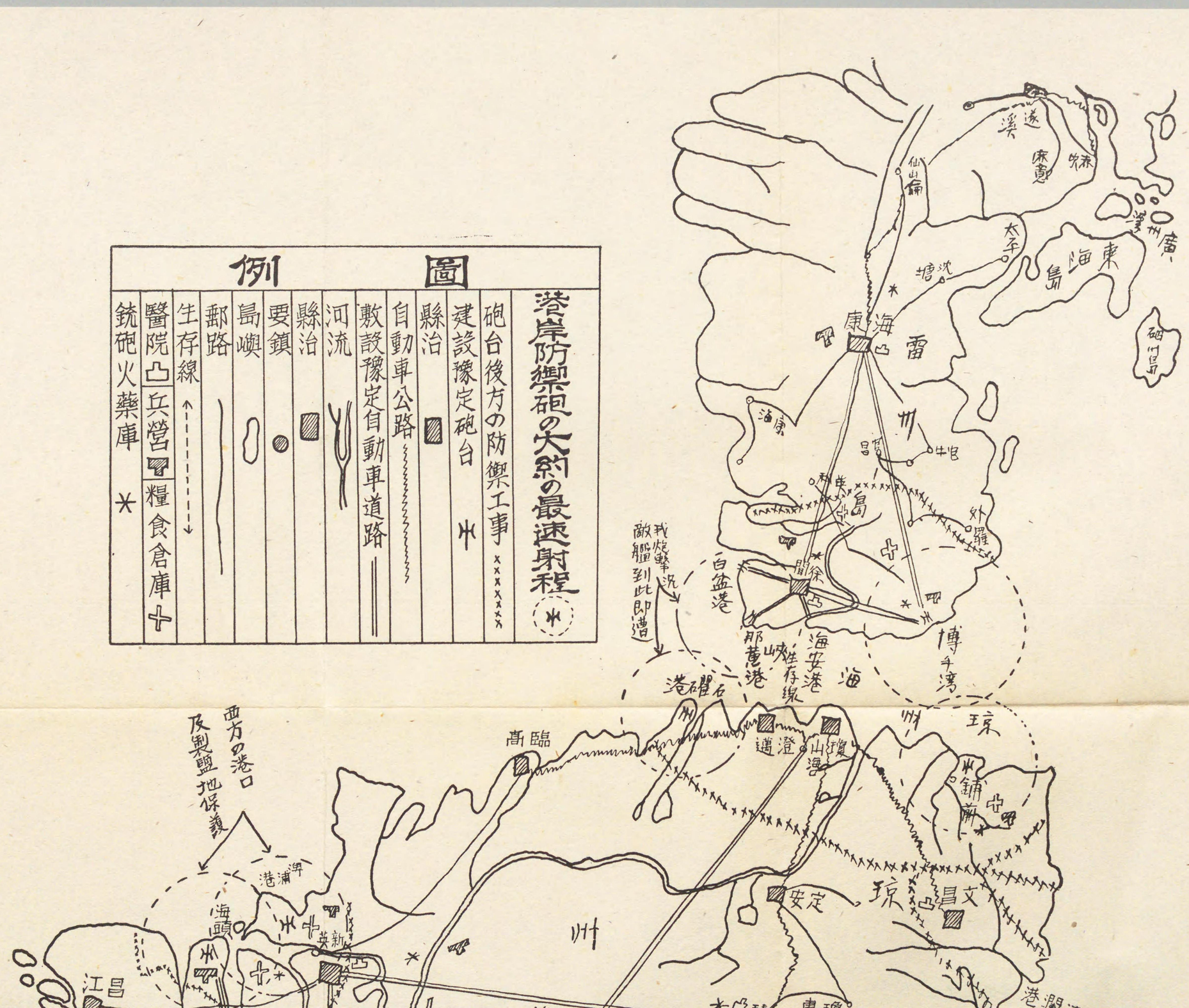
る。海南島を失へば雷州半島危く、雷州半島危ふければ海南島も亡びる。且つ雷州の土地肥沃なることは、海南島に劣らず、開發すれば良好の水田數萬町歩を得られ、大いに廣東省の食料問題を解決することが出來る。民國以來地方に事件が多く匪賊横行し、殺人は野に滿ちて白骨山をなし、住民の六割以上は死亡して終つた。この土地の水田は野原と荒れ、動物類の巣窟となつてゐることは實に惜しい。今や國内は統一されて立派な政治が行はれ、盜賊の出沒を容れない平和な時代に於いて、若し計畫通りに實行することが出來れば、相當の兵力をこゝに駐在せしむれば、外には强隣に抵抗することが出來、内には農業を保護し、開墾者をして自ら安心して耕作に從事せしむることが出來る。若し海南島を注視し雷州半島を輕視するならば大きな誤謬である。

第五章　海南島の産業狀況

第一節　林　業

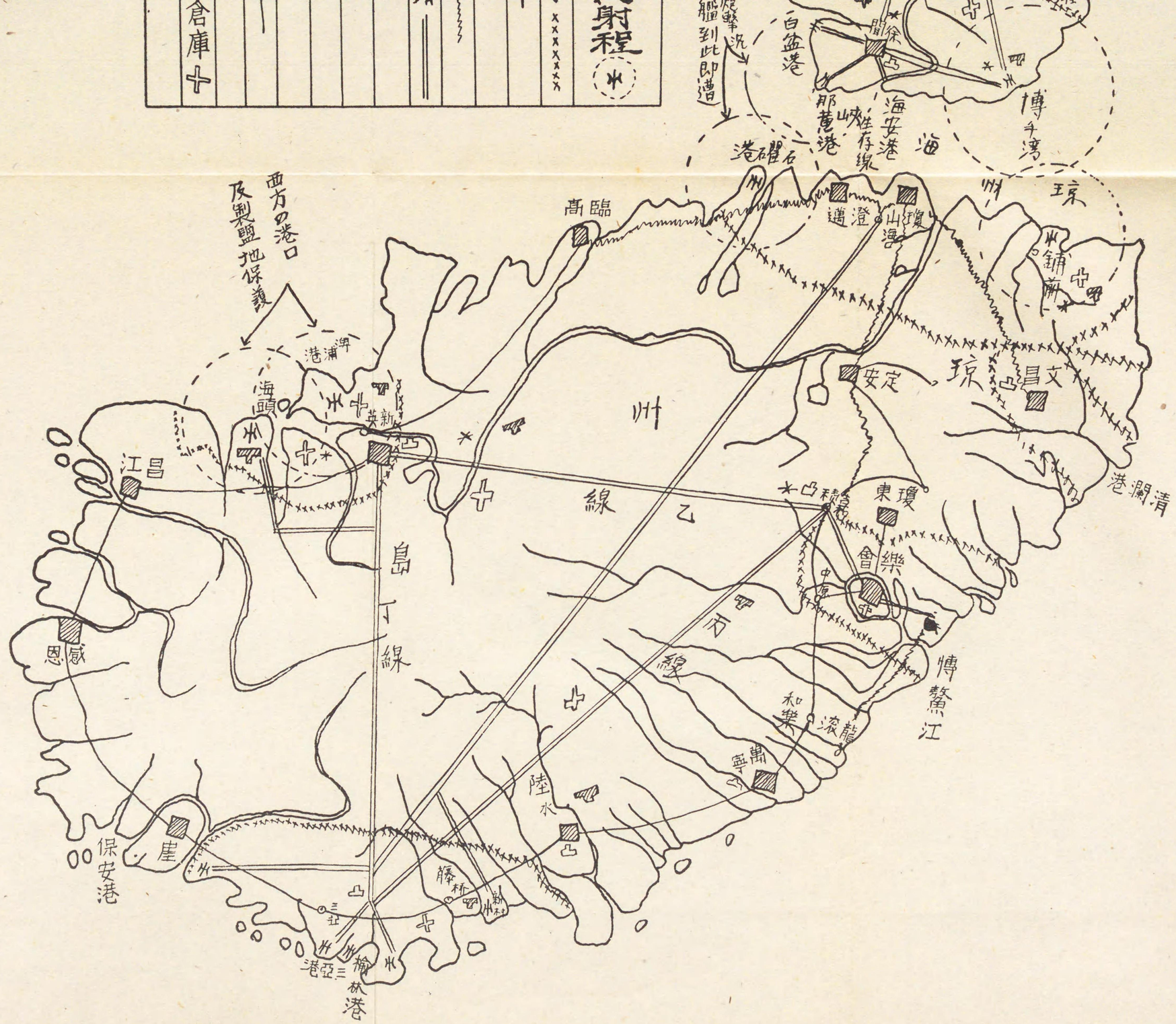
海南島には天然林面積合計約百六十五萬三千餘畝あり、産出する木材は全島至る處に分布されてゐる。即ち花梨・石枳・坡壘・苦枳・油楠・香楠・天料・紅椰・橡楠・芳果・青皮・紅羅・香椿・竹葉松・鶯哥・果槁・辣棕・山松・馬尾・高根・猪尖・青梅・龍果・沈香・茄楠・胭脂・籐・紅松・黄沙椽・山海棠・香桂・山蕉・黄槲・青綫等の類で、中には有名なものもある。且つ數百年の古木があつて、その直徑は約二三呎にして、滿目皆これ古木ばかりと想ふところがある。これ等の木材は建物の棟・楔、鐵道の枕木、銃柄或は棺木等各種の器具に作られ、その用途の極めて廣汎なることは、材木に勝るものはない。交通不便、運輸困難なるを以て、良材も棄てゝこれを顧みない。且つ森林地帶には多く土人が住み、支那人は氣候の不良を懼れ、一方土人は居所を失ふのを畏れ、伐採を行はない。土人は





ふところがある。これ等の木材は建物にて廣汎なることは、材木に勝るものは林地帶には多く土人が住み、支那人は

で、中には有名なものもある。且つ數百年の古木があつて、その直徑は約二三呎にして、滿目皆これ古木ばかりと想ふところがある。これ等の木材は建物の棟・楔、鐵道の枕木、銃柄或は棺木等各種の器具に作られ、その用途の極めて廣汎なることは、材木に勝るものはない。交通不便、運輸困難なるを以て、良材も棄てゝこれを顧みない。且つ森林地帶には多く土人が住み、支那人は氣候の不良を懼れ、一方土人は居所を失ふのを畏れ、伐採を行はない。土人は



木材の用途を知らないので、甚しきは放火して林を燒くのもある。土人はその山にある樹木を切り落し、燒却して肥料となし、地面に穀物を植付けるが、二三年にして地味が瘠せると、この土地を放棄して他の山を燒くのである。即ち刀耕火種と言はれて、常に數十萬に値する木材を燒却してゐる。甚だ惜しいことである。輕い材木の運搬方法としては、多くは手車を用ひ、河流に近いものは水力を用ひて流し、また筏の樣に組合はして流すのもある。また山上の木材は地形を利用して、傾斜のあるやうに掘つてそれから運び出すのであるが、數噸以上の巨大な材木は即ち運搬する方法がない。全島の木材は合計約四千五百萬本、毎年平均國幣約二元とすれば、總計約九千萬元以上の價値がある。若し海南島防禦の各種武器の購入準備に海南島の木材を全部伐採して賣出せば、その金額は幾らか武器購入の資本ともなる。海南島の材木を使用する爲には、最初に土人の頭目と利益上に於ける相談をなし、協力して林内に通ずる自動車道路の施設及びこの處に製材工場を建設することである。その森林内にある各種木材を積立て得るやうに製材して、國内及び外國の材木商に賣渡すことなどである。どんな種類の木材を望むかは、購買者からその樣式及び方法を提出せしめ、その樣式通りに依つて森林の製材工場でその通りに製材して搬出するのである。斯くすれば巨大の木材と雖もその重量を輕減せられ、自動車に依つて積出し荷渡し得る。また製紙は多くは竹木を主なる原料にしてゐるので、製材工場にて鋸で挽いて、殘る樹皮・木屑等を集め製材工場附近に小規模の製紙工場を建設して以てこれ等の廢物を利用する。即ち鋸の木屑は紙となるので利益も亦莫大である。政府は宜しく土民に對し森林に放火することを嚴禁し、人民に造林を奬勵して材木の用途を知らしめねばならない。

第二節　農　業

海南島の水田面積は三萬九千五百餘頃あり（頃とは面積の單位にして、一頃は田地百畝卽ち六十萬平方尺である）、已に耕作してゐるのは百分の五・七强に過ぎない。民國二十三年の調査に據れば二千二百餘頃に過ぎない、故に荒蕪の田畑が大部分を占めてゐる。斯樣に廣大な地を若し雷州半島と同時に開發すれば、廣東の食糧問題は自然に解決し得る。

『瓊州府誌』に曰く「南方は氣候暑熱にして、年三度熟る」と。この土地は氣候がよく農業に適する點から、政府は租稅を相當重く徵收してゐるが、然し水利は未だに勃興せず、植付及び肥料の施し方は未だ科學方法に依らず、耕作器具は改良されてゐないため生産米も少量にして、毎年尙ほ他國米を輸入して救濟するのであつて、實に天惠はあれどもそれを生かす方法を知らないのは甚だ惜しい。人民の利益及び政府の收入を增加するには、政府は租稅の徵收を減じ、また努めて農民の工作を保護し、農民をして喜んで開墾と耕作に勵ましむることである。政府は或は暫時收入が減少するかも知れないが、日增に面積は增加し、産物は豐富となりその收入は必ず增加する。然らざれば、政府の收入は絕對に增加することなく、農民の收入は日增に減少して行く、人民はこの重い租稅の負擔により、勢ひ荒蕪の田畑を開墾せず、坐してその荒廢するにまかせて顧みないのである。甚しいのに至つては敢えて自分の田を自分の田と承認しないのである。人民は旣に田のあることを願はないから、經濟は日に〳〵困窮し、租稅の徵收も日に〳〵減少し、自殺の策を取つてゐる。海南島の開發計畫には現在實施されてゐる各種の稅金を廢して、人民をして各種の實業開發に從事せしめ、生産の充足によりこれを支出することを原則とすれば、海南島農實業の繁榮は期して待つべきである。

海南島の地形は中央高く四方低く丁度龜の甲の如くである。五指山は分水嶺で六つの川が源をこゝに發し、流域の土地はよく肥えてゐるが、河川に面しない水田は常に旱魃に遭ひ、また大雨に遇ふと洪水氾濫してその害を蒙る。これは雨水の分布が平均しないからであつて、治水にはよく各縣の水源を視察し、小河を開いて上流の水を平野の灌漑

地まで引くか、或は適宜の地點に池を掘つて水を蓄へ灌漑の用に供給すべきである。旱魃には水揚ポンプを備へて枯渴を防ぐのである。その工作は各縣の囚人をこれに充らしめ經費を節約する。また農工指導所を各區に應じて設立し、稻苗の試驗、植付と施肥及び害虫驅除の方法を指導する。耕作器具も勿論改良を要するものであつて、耕耘車の如きは、平時は耕作の用をなし戰時には僅かの時間で機關銃運搬車と毒瓦斯の輕戰車に改裝することが出來る。政府はよく農民を統制して五千畝或は一萬畝每に組合として、この種の機械一個を購ひ、平時は耕作の用をなし、戰時には農民を訓練して、容易にこれ等の小型タンク車を利用して抗敵工作の一部分に任ぜしむることである。また全海南島で用ひらるゝ精米機は全部で十五台であるが、將來は必ず不足するのであつて、今より計畫して水力精米機を建造し、燃料の節約を計ることが大切である。然してその發動機には木炭或はコークスを應用するのが有利であり、外國よりコールタール或は石油を購入する費用を節減し得るのみならず、供給が萬一缺乏した場合にもその急を救ふことが出來るのである。

椰子

椰子は海南島固有の特産物で、その用途最も廣く、從つてこれによる利益も甚だ多い。全島沿海一帶の土壤は、悉く椰子の栽培に適し海南島東方各縣の一帶は最も好適である。今その用途を次に略述する。軍事方面に關して言へば、椰子樹は高さ數丈で枝はなく、その葉は長さ數丈に及ぶを以て、全島に椰子樹を多く栽培すれば綠葉の遮蔽の爲、支那の軍事行動は敵の海空軍の偵察を困難ならしめる。敵に目標なければ爆擊も困難である。椰子の果實からはグリセリンを搾取して爆藥を製造する。その殼灰には約四十%のアリウムを含有し石鹼製造の原料となる。防毒面具には大いにその活性炭素を利用して製造することが出來る。卽ち國防の爲に宜しくフィリッピン種を植ゑるべきである。フィリッピン種の果實は大きくて數も多くしかも肉も厚くなる。政府は最大限度まで椰子の稅金を減じて、椰子

栽培を奬勵し工場を設けて、椰子油・グリセリン・海棠油・山柚油・落花生油等を搾取すべきである。海南島に產する椰子殼灰及び護謨を利用して大規模の防毒マスク及び防毒衣製造の工場をこゝに設立することも出來る。椰子の用途に至つては、椰子の根は醫藥上の收斂劑となり、その幹は柱・橋梁・舟筏の材料となり、その葉は蓆を編み、捕魚器具などが作られる。未開花前の椰子樹の花梗を切開して多量の糖液を採ることも出來、椰子酒を釀造せられまた醫藥では便秘劑をも作る。果皮からは掃帚・船の纜などが作られる。椰子の果實肉は各種の食料品を作り、搾取された椰子油は、料理または工業用原料となる。また椰子の殼は杯・茶壺・碗等の如き用具に用ひられ、その布は靴底に用ひられ、椰子水は飲料となる。その用途は枚擧に遑がない。椰子は植付後七年乃至十年で收獲が出來、一本に付毎年少くて八十錢多くて一圓四十錢の生產がある。即ち椰子樹一萬本あれば毎年平均約一萬圓の收獲がある。その壽命は七八十年、毎年一萬圓の利益を得るとすれば、六七十回の收入がある。收獲後はまた木材の代用に使はれ、その利益も亦大きい。故に椰子の栽培には文昌縣一帶の人家に就いて、椰子樹の數を調査し多寡に應じて栽培を奬勵するのである。沿海は椰子を植ゑるに好適の土地甚だ多く地價はやすい。僅かの食鹽或は石灰を肥料として栽培するのであつて、土人は椰子を植ゑるに早くから智識と經驗とを有してゐる。椰子の苗木一本約五錢、その培養費（第一年より第七年に至る合計）一本國幣約一元二角、椰子未成長前は、椰子樹の樹間に豆科植物を多く植ゑてこれによる利益をはかり、椰子未收獲前に於ける副業となすのである。

護謨樹

軍需工業には必ず護謨を必要とする。防毒マスク・防毒衣・飛行機及び自動車のタイヤー・電信・電話の絶緣體・醫學上の治療機械・工業用電氣工場の護謨板・靴及び雨衣等の如きは、何れも護謨を以て製造する。現在海南島の護謨樹を調査するに約十六萬本あり、而して一本につき毎年產する護謨量は四ポンド乃至六ポンドにして、假に四ポンドとして計算すると現在毎年護謨の生產量は四千八百三十擔に上る。稅關報告に據れば民國二十五年度の輸出護謨は僅か一、〇一〇擔で、實際上記の生產數量と比較するに大した相違である。その原因は土地の如何ではなく、實に植付方法が悪いからであつて、護謨樹を割る技術が未だ熟練してないのと、また護謨の製造方法が未だ改良されてゐない爲である。宜しく專門家を招聘して指導を受け、護謨工場を設けて各種用具を製造すべきである。即ち工場の新設に依つて護謨園の生產品を買收すれば、人民は喜んで栽培し年々巨額の正貨が外部に流出するのを防ぐことが出來る。また一面失業者の救濟ともなり實に一擧兩得である。凡て軍需工業に關係ある植物で國內になくて海南島だけにあるものは椰子・護謨である。政府は宜しく人民を奬勵して、特定の區域にこれ等の植物を栽培せしめ、該區域內に於いては他の一切の植樹を禁止して戰時の需要に供すべきである。況んや現在の戰爭は、兵と兵との戰爭ではなく、完全なる民族の戰爭であるに於いてをや。戰時敵が悪性毒瓦斯を用ひて支那の城市を攻擊する時、催淚性毒瓦斯でさへも防毒マスクに非ざれば防ぐことは出來ない。即ち各人夫々防毒衣一式を所有してこそ始めて生存し得る。支那の人口は四億あり、戰時工作人員及び襲擊を受ける可能性ある地帶の者を計算すると、少くとも一億着を要する。將來必要とする護謨量は餘りに多く、海南島は護謨特產の地と雖も亦需要に應ずることは困難である。然し不足の場合は海南島に產出する桐油に依つても防毒衣を作ることが出來るので、政府と人民とは協力して增產を圖り、以て需要に應じなければならない。護謨の壽命は大體に於いて六七十年で、一畝に二十三本植ゑられる。一畝に要する護謨の種子及び六年間の培養費用は約三百元、六年後には通常一本の木から四ポンド乃至六ポンドの護謨を得られるとすれば、その收益の程度はこれに依つて推量することが出來る。

馬鈴薯

海南島の氣候及び地質は共に馬鈴薯を栽培するに適する。馬鈴薯は食料品にもなり、アルコール製造用にもなり、

また肥料にもなる。アルコールは無煙火藥内の棉火藥及び醇精（エーテル）を製造する處の必需品である。政府は宜しく人民を奬勵して馬鈴薯を栽培し、アルコール及び肥料を製造する工場を設けて、平時及び戰時の需要に供すべきである。

棉

棉には三種類あり、即ち長絨・中絨・短絨にして、支那北部各省には短絨及び中絨の栽培が盛んであつて、長さは約〇・五吋から〇・八吋で、二十番手程度の粗糸の紡績糸に供せられ、支那の紡績工場に適してゐる。但し在支外國商紡績工場の綿糸と比較することが出來ないので、高級綿織物を製造しやうとするには、外國商人から棉の供給を仰ぐより外ない。外國商人は長絨の棉を用ひるから製品も優良である。この種の棉は熱帶地方でなければ栽培せられない。數年前無錫の尤惜陰氏が海南島に來てエヂプト棉を試驗的に植ゑたが、その結果は甚だ良好で一月に種子を播き六月には結實するが、その實は桃の如く大きく、纖維の長さは七分乃至一寸三分で、八十番手の細糸を紡ぐことが出來、また連續的に三個年收獲が出來るのである。その品質は世界的最優良品である。調査に據れば民國二十二年のこの種類の棉花輸出量は二百萬擔で、價格五千萬元に達してゐる。而して將來植付面積を廣むれば巨額の產出を見るべく支那軍需工業の用に供するに充分である。

亞麻仁

亞麻仁は工業の重要原料にして、印度及びアフリカ洲等の熱帶地方に產出してゐるが、海南島も亦亞麻仁の栽培に適當地であるから、宜しく今後植付面積を擴張して需要を滿さなければならない。

屢籐

屢籐は海南島の深山植物の一に屬し、その產出も亦多い。土人はこの種の植物を河の中に投げて、魚類を醉暈せしめてこれを捕つてゐる。傳說に依れば某外國人が海南島に人を派遣してこれを買集め、南洋へ輸送して賣買するのを英國人に發見され、英人はこの屢籐を試驗して、毒瓦斯を製造する原料になることを知つたさうである。吾人はこれを早く化學者に渡して研究せしめ、確實に毒瓦斯を製造することが出來るならば、輸出を禁止するとともに廣範圍に植付をなして戰時の需要に供すべきものと思ふ。

甘蔗

海南島の甘蔗の產出量は甚だ豐かである。諺に「二分の甘蔗二分の水稻」と言はれ甘蔗を一回植ゑると二三年間は毎年二回の收獲が出來る。人工と肥料は經費の問題が伴ふが、その自然の生長に任すことが出來れば甚だ經濟的である。然し種類の選擇、製糖及び植付の方法は未だ研究されてゐないので甚だ惜しむべきである。現在海南島で栽培してゐる甘蔗の種類を調査したところに依ると、紅皮蔗・竹蔗・牛蹄蔗及び黃皮蔗の四種であつて、これ等は全島に栽培せられてゐる。普通は播種後十個月で收獲する。製糖方法としては、大石の軸を地面に堅てゝ、二頭の牛を適當の間隔に使つてこれを廻轉し、甘蔗を軸の中間に置いてこれを壓搾し、出た蔗汁を鍋に移して煑つめる。煑つめたものが塊になつて砂糖になる。海南島の白砂糖の製法は、僅かに煑つめた蔗汁を一個月間靜かに置いて砂糖にするのである。一畝の田から四五擔の砂糖が取れるが、台灣・ジヤバ等では一畝に二十餘擔の砂糖が取れる。海南島の砂糖の質は不潔で從來餘り歡迎されてゐないが、苟くも將來蔗種の改良及び植付方法の研究竝に機械による蔗汁壓搾の方法を研究し、白砂糖製造の工場を設けて努力するならば、その生產品は決して台灣產に負けない、故に外國よりの砂糖の輸入が制限せられて、正貨の獲得を確保することが出來る。

麻

麻の海南島に產出する量は甚だ多く、その用途も亦廣い。麻は麻布を織つて衣服とし、戰時は土囊を作り、その需

要は極めて廣いのである。高州の梅菉では麻袋を製造する工場を設立したが、集まる麻は少くて需要が多く、今後極力栽培して需要に應じなければならない。

規那・高根樹

この二種の植物は製藥に用ひられる。海南島の何處でも栽培せらるゝので、平時及び戰時の需要に應じ得る。

柚　木

柚木は各種の高尚な器具を造る材料となるのである。現在外國から輸入してゐるので、海南島は更に多くこれを栽培して需要に應じなければならない。

咖啡・檳榔・海棠樹

この三種の植物は海南島にも栽培せられると思ふ。咖啡は飲料の一で、檳榔は食品の一である。また藥品の原料となり、毎年の輸出は甚だ多い。海棠樹の核の油は壓搾して石鹼製造の原料となる。また燈火油ともなるのであつて、化學的方法に依つてこれを精製すれば、また機械油にも用ひられるのである。

その他の植物

その他の植物は蜜柑・ザボン・艾粉・龍眼肉・莫薑・薏米・籐・芝麻・香蕉・芒果・パインナツプル葉・荔枝、パインナツプル・煙草・靛青・龍眼・茶等の栽培に適してゐる。パインナツプルの葉はまたパインナツプル麻布を紡織する原料になる。現在海南島は甚だ多くのパインナツプルを植ゑてをり、これは小資本で利益が多いと云はれてゐる。

第三節　鹽　業

鹽は食料となりまた軍需工業の必需品でもある。軍需工業の用途に就いて言へば、鹽は鹽酸・硝酸・硫酸・炭酸ナトリウム・ソリウムヒロエキシデ及びその他の有毒の氣體を製造することが出來る。食料方面では普通人は毎日約十五瓦以上の鹽分を尿中に排泄し、勞働者・農夫の如き身體には鹽分が特に必要である。人體の血液中には平均百分の九の鹽を含有し、これより多過ぎたり少な過ぎたりすると何れも不健康の現象を呈する。昔蔣介石委員長は共匪に食鹽の供給を絶つたところ、共匪は遂に支持が出來なくなり平定したことがある。從つて鹽は食料品中の重要品であることを知らねばならない。苟も戰爭があつたならば、敵は必ず沿海の支那の鹽田を破壞し、支那の鹽運輸の封鎖策に出たならば、戰爭はこの爲に敗けとなるのである。また海南島の沿海一帶は各種の魚類を盛んに產出し、天然の好漁港であるが、鹹魚製造には必ず鹽を用ひてゐるからである。故に海南島の鹽田は必ず保護開發すべきである。鹽は現在重要生產品となつてをり、全島輸出額の百分の六十を占めてゐる。用途は海南島の食料に供給する外、多くは廣州を經由して廣西・湖南各省に賣捌かれてゐる。製鹽場の主なるものは儋縣の新英港・白馬井、昌江縣の北黎・墩頭港・港門、陵水縣の新村港沿岸、崖縣の三亞港・榆林港沿海及び臨高縣・文昌縣・萬寧縣・瓊東縣等である。更に以上の土地に製鹽工場を擴張するなれば、戰時は數省の需要に供することが出來るのである。現在鹽公司が製鹽を業とする一般農民から廉價で買收しようとするので、農民の生活は殊に苦痛を感じてゐる。海南島の鹽は現在種々の關係により賣行き停滯してゐるが、政府は速かに鹽を原料とする化學工業の發達を圖り、貧苦の製鹽農民を救濟せなければならない。

第四節　漁　業

海南島の魚の產出は三亞・榆林の二港最も有名にして、榆林は間もなく軍事要區になるので、將來製鹽工場及び漁業場を設立すれば、また工業區と漁業區になつて、この港は必ず繁榮するであらう。この二港の產物で最も名あるものは、孟魚及び烏賊で、海南島の需要に供する外、乾魚或は鹽漬として香港及び廣州へ捌かれて行く。調査に據れば毎

年三亞よりの輸出は合計八百餘擔ある。その他の魚港としては鶯哥海・新村港・新盈港・新英港・清瀾港などこれに次ぐ。全島の漁船數は四千餘隻、漁民は約四萬人である。惜しいことには捕漁方法の多くは舊式にして、器具もまた粗末のため發達他國より遲れ、賊國の漁船は群をなし隊を組んで支那の領海を侵略しつゝある。彼は新式捕漁方法を以て海產を盜捕し、毎年支那に比較して二三倍以上獲得して行く。一年間の海南島漁獲海產額は總計約三百萬元に達し、賊國が一年間に海南島沿海に於いて盜捕する數はこの二倍即ち六百餘萬元或は三倍の一千萬元に及ぶ時もある。彼は公然と來り公然と去つて行くので抗議は虛文となり、文書の往復は徒費に終る。この弊害を斷絕する爲の計略としては、海南島の防備計畫を完成し、爆擊機による支那領海に侵入する盜賊船の爆擊である。賊は先に條約破棄をしたから、支那が爆擊を行ふのは條約拋棄後のことで、支那に條約の遵守を欲せば、賊國の漁船は當然支那の領海に侵入出來ないのである。支那は卽ち武力を以てするかはりに公理と主權を以て維持するのみである。斯くすれば一年七百萬元乃至一千萬元の損失を輕減し得る。漁業に對しては當然に發動機漁船を設け、新式捕漁器具を購入し、水產陳列所及び漁業講習所を榆林・三亞・新英・新村・鶯哥海・清瀾等の港に分設し以て漁民の指導に當るのである。海南島の魚類は種類が多く、鯛は北黎から臨高に至る海中に產し、石班・白鯧・サハラは崖縣・文昌・陵水の三縣に產し、鮫及び波立魚は三亞・鶯哥海・新村等の港に產し、明蝦は海南海峽に產し、膏蟹は萬寧に產し、海蟇は三亞・陵水・榆林等の港に產し、比目魚は新盈港・白馬井・海頭・海尾港に產し、鯛魚及び帶魚は臨高と儋縣に產し、その他尙ほ章魚・旗魚・厥魚・刀魚・白飯魚・旗脊魚・白鱔・倒掛魚・燕魚・鱒魚・槍魚・石柱・沙蟲・翻車魚・針魚・角魚・泥猴・鮨魚・嘉魚・鰌魚・鱗尖魚・長魚・玳瑁・水母・九昆魚・海馬・鯪魚・飛魚・鯿魚・霎魚・黃鯧・剃刀魚・長嘴魚・鰌魚・金線魚・黃花魚・馬鬃魚・烏賊・鯪魚・鮶魚・馬鞭魚・河豚・鏡魚・烏鯧・綠鱗・龍蝦・蟹蟆・海蛇等の產がある。

第五節　牧畜業

海南島は四季共に寒冷でなく、年中牧草に缺乏しない。廣大なる草原の雜草は牛羊の食料に供し得る。家畜には水牛と黃牛とある。水牛は體が大きくてしかも力が强く、種々の工作の勞に任ずることが出來る。百姓は牛を澤山飼つて副業となしてゐる。山牛は山に棲み、自由放牧を行つてゐる。牛の所有主を區別する方法は、牛頸に木鐸を帶び、角或は耳或は尾等の部分に一記號を刻み、飼主に屬することを示し、混合しないやうにするのである。家牛は卽ち村近くの山の麓に飼育して耕作用として、毎年輸出約三十萬元に達し、牛皮の輸出は約四十五萬元、牛角の毎年の輸出は約二千二百元に及び牛の膠は約五千餘元である。牛皮の用途は甚だ廣く、靴・トランク・馬鞍・彈藥盒・銃のサツク等を造る材料となる。現在皮革製造工場が設立されてゐるが、規模は尙ほ小さく、皮革製造の技術は幼稚で、製品も大多數粗製品である爲、未だ外國の皮と比較にならないのである。政府は宜しく大規模の皮革製造工場を海口に設けて、優れた技術を以て全島の牛皮を製造するばかりではなく、且つ欽縣・廉州・高州・雷州等の各地の生產をも吸收し、以て大量生產をなして全國の用に供すべきである。馬は海南島に產するも、優良種なく住民は多く乘用に使つてゐる。羊の生產數は甚だ少いのは、海南島に羊の飼養を奬勵する人がないからであつて、若し牧畜業者がその利益を知つて牧場を擴大し極力飼養すれば、必ず他省の羊と競爭することが出來る。豚は海南島輸出の主要畜類にて、毎年の輸出頭數は六萬餘頭である。鷄は文昌の產出が多い。鴨は嘉積から產出するのが優良である。鵝鳥・鳩も亦多數に產出する。以上種々の畜類は飼養に一定の方法がなく、醫術に乏しくまた產量增加の爲に外國種を試用しないことは惜しいことである。若し生產額の增加を圖るならば、種類を選擇して飼養し、畜類療養所を各地に設立して科學的牧畜方法により指導せば生產も自然に增加する。傳書鳩も亦多數に飼養しこれに訓練をなし、戰時に備へて通信の用をなさしむべきである。海南島は植物繁茂すれば、多くの養蜂場を設けて各種の蜜蜂を飼養して見ても利益が少くないであらう。

第六節　鑛　業

海南島の鑛產物埋藏量は豐富にして、鐵鑛の分布地點は、萬寧縣の和樂市・長橋、定安縣の加邪村・牛角嶺・南牛嶺・東蚩嶺、文昌縣の湖尾村、臨高縣の高山嶺等。石炭及び石油の分布地點は崖縣の楡林港・官村、文昌縣の七星嶺、瓊山縣の天長湖・甲子嶺、儋縣の那宋嶺、臨高縣の第三區汶水、感恩縣の我查嶺・鷄毛嶺、澄邁縣の石鼓嶺等。水銀鑛分布地點は萬寧縣の龍滾市附近、樂會縣の中原村・干湘村等。化石礦は崖縣の三亞港に產する。金鑛の分布地點は文昌縣の金牛嶺、儋縣の那金・南加綠・六瓦・白泡・青山、陵水縣の猴子嶺、感恩縣の古鎭峒・羅望嶺・尾乍溪、瓊山縣の元滿峒・紅茂嶺、崖縣の九所村・瑯琊嶺、臨高縣の蘭洋市・馮家山、瓊東縣の禮埇嶺、昌江縣の樂梅嶺、定安縣の合根嶺・南個嶺・啓托嶺及び毛西舖附近一帶等。高陵土鑛の分布地點は定安縣の烏坡市、瓊山縣の龍塘牛屎嶺附近。銅鑛の分布地點は崖縣の酒風嶺・樂安市・六羅村、澄邁縣の石鼓嶺、樂會縣の不徧嶺、陵水縣の新峯嶺・銅嶺、定安縣の嶺門市附近必滿村等。銀鑛の分布地點は崖縣の北山嶺、陵水縣の挖銀嶺、澄邁縣の銀嶺・黃嶺市附近の西溪嶺、儋縣の調南市、昌江縣の大神山白石、樂會縣の黎區蒙天嶺等。硫黃礦の分布地點は樂會縣の上波廟前石角村分界市附近・嘉濂溪、萬寧縣の舉隆市附近、崖縣の九所市附近、感恩縣の佛陀村・必喃嶺・黎盆沸水溪、文昌縣の古成村、瓊東縣の孟里村等。油頁岩礦の分布地點は崖縣の六羅村、陵水縣の望天塘等。方鉛鑛の分布地點は樂會縣の總口田、崖縣の山脚村七公嶺、定安縣の嶺門楓木市嶺仔村等。石灰石は儋縣の大寶山五嶺に產する。磁鐵鑛は定安縣の日晒嶺に產する。アンチモニー鑛の分布地點は澄邁縣の南龍嶺、定安縣の長嶺溪、崖縣の九所市附近の山脚・樂安浮弛等。珊瑚樹は崖縣の鐵爐港に產する。石墨礦の分布地點は瓊東縣の牛壓嶺・墩尾嶺・白利坡・少峯嶺・東尖嶺及び定安縣の南閭市附近等。菱鐵鑛の分布地點は樂會縣の黎區黃姜田、定安縣の嚕嘮洞・什林の溪等。マンガン鑛は瓊東の土瓜

嶺に產する。鉛鑛の分布地點は感恩縣の義溝洞、崖縣の老麥溪、陵水縣の鳥牙峒等。シリコン鑛の分布地點は昌江縣の英潮港、陵水縣の走客村、萬寧縣の白沙港等。電氣石は儋縣の西扮附近に產し、硫化鐵鑛は文昌縣の古成村に產する。雲母片の分布地點は定安縣の新村仔、儋縣の淘金溪・深溪嶺等。アルミニウム鐵鑛の分布地點は定安縣の在增嶺・牛鼻灣、儋縣の海頭等。錫鑛の分布地點は感恩縣の麻姑嶺、儋縣の瓦屋・西扮・西田、陵水縣の新峯縣、定安縣の嘮喃峒、龍門市等。實業局の調査に據れば儋縣の那大一帶は各錫層で、厚さは約五十米より六十六米、その質は三十三立方米體積の砂土毎に、普通錫砂八十瓩を得られ、錫鑛區は九萬八百公畝に達し、產地は儋縣にある那大・海口・五指山・南託村圯一帶とし、開發の度甚だ速かにして、民國二十三年の調査では僅か九十六公擔の產出、價格は二五、二八八元であつたが、同二十四年に至り八百三十六公擔を產出し、價格は一八〇、八三七元となり、同二十五年には更に進展して千餘公擔に達した。現在採掘してゐるもので錫鑛は最も發達したが、これはこの地方から海外に行つてゐる華僑が歸鄉して投資したもので、彼等は多くは南洋より歸り、何れも經驗を得てゐるので、採掘は自然容易である。その他各鑛は種々の關係により、資本・器具・交通・人物等の缺乏に依つて未採掘のもの多々ある。政府は宜しく人民或は官廳と商人との合資事業を奬勵し、或は外國資本を借入れて（主權を喪失せざるを以て原則となす）海南島鑛產を開發すれば、工業の原料を得、國防力は充實せられ、自給自足が可能である。尤も石炭と石油は最重要品にして、各種機械・自動車・飛行機・軍艦・タンク・工場等はこれ等の燃料がなければ運轉することが出來ない。クレマンソウ氏が言ふに「明日の戰爭に備ふる石油は、正に人類に於ける血液の如し」と、フオツシュ將軍も亦言ふ「一滴の石油を得れば、血の犧牲の一滴を減じ得る」と。先づ以て石油が戰爭及び工業上重要な地位を占むるを見るべきである。海南島に從來この種の鑛山說があり、速かに方法を講じて探險採掘すべきである。殊に國內の陝西・新疆・四川各省等にこれを求め、或は代用品を研究して未來の大戰に備へ、平時は各種機械工業發展用に供すべ

きである。海南島の各種鑛物は工業上に關係を有し、軍用品の製造も亦可能である。鐵は古來武器の製造には主要原料であるといふことは、古今共に知る所で贅言を要しない。戰爭に最も多く消耗するものは彈丸と火藥であつて、その原料は文明諸國と雖も亦自給自足が出來ないが、然し海南島では彈丸の原料は九割を供給し得る。茲に略述すれば彈藥は藥莢・彈丸・雷管及び無煙火藥の四分子が配合されて出來る。藥莢は銅と亞鉛の合金よりなる。銅は澄邁・陵水・樂會諸縣に產出し、鉛は陵水・感恩縣等に產出し、亞鉛は崖縣に產出する。藥莢の原料は亞鉛一割、その成分は必ず九九・九六%以上でなければならないのであつて、九九・八五%以下は役に立たない。故に亞鉛の精錬術を研究し亞鉛精錬工場を急速に設立しなければならない。彈丸は包皮と鉛の中味に依つて製造せられ、包皮の白銅は銅とニツケルである。銅は海南島より供給し得るがニツケルは未だ本當に產地を調査し得ないので、現在は他國の供給に仰がねばならない。海南島の鐵鑛でマンガン及びニツケルを含有する混合鐵鑛は相當あると聞いてゐる。果してそれが事實であつたならば、即ちニツケルの問題も亦解決せられる。彈藥の彈丸は鉛を以て主成分とし、その品質の硬いことを必要とする爲、これにアンチモニーを配合するのである。アンチモニーは定安縣・澄邁縣等に產出する。雷管内の火藥は昇汞を主成分とし、その原料は水銀・酒精・硝酸の三種であゝ、水銀は樂會縣・萬寧縣等に產し、酒精は海南島に植ゑられる馬鈴薯に依つて製造せられる。硝酸は化學工業の主要原料であつて、その製法は二種ある。(一)硫酸と苛性曹達を化合せしめて製造せられる。而して苛性曹達の產地は南米智利にして、原料は智利に仰がねばならないからこの方法は用ひられない。(二)空中より窒素を採取して製造する。これには二種の製法がある。(1)アツク法極く強大の電弧を以て空氣中の酸素と窒素とを直接化合せしめて、一種の氣體となしその中に含有する至つて微かな酸化窒素とし然る後酸素を加へて二酸化窒素NO_2となす。更に諸吸收筒内に置いて水中に吸入せしめて硝酸となすのである。(2)アンモニア酸化法　アンモニア瓦斯を白金棒に接觸せしめ、酸化作用を起さしめて硝酸となす法である。

前者は強大の電力を應用して製造し、後者は使用電力は割合に少い。但し設備は甚だ繁雜でまた多量の白金を必要とする。白金鑛は支那には現在產出しない。故に硝酸製造にはアツク法を用ふれば餘程便宜である。窒素工業は人類生存上の一大要素をなし、窒素は植物一切の主要成分である。肥料の三要素は窒素加里及び燐酸である。農產物の豐作を欲するには須らくこの種の肥料が必要である。海南島の農業及び工業を發展せしめんとするには、實に大規模の肥料工場を設立することである。無煙火藥は三種に分けられる。一は硝化纖維素式、二は海軍が用ゐるコニタイト式、三は歐洲大戰の當時に常用した無溶劑式である。彈藥に用ひてゐるのは硝化纖維素式で、棉屑(海南島は棉を植ゑられる)・硝酸・硫酸(硫黃より造られ、樂會・萬寧・感恩・崖縣等に產出する)・酒精・醇精(以上の二つは海南島に栽培せられる馬鈴薯で製造する)・黑鉛(純粹の粉末は貴重にして、英國の製造品は各國で最も賞用される)及び耐熱劑を以て製造するのである。彈藥の電管内には大概些少の錫箔があつて火藥の濕りを防ぐ、この種の兵器材料は常に靑銅を以てこれを造り、砲彈上の信管蓋も亦必ずこれを用ひて濕氣を防ぐ。錫の產出の最も多いのは英國で、戰時は米國も亦その支配を受ける。海南島の錫の生產狀況は已に上述の如くであつて錫の問題は解決し、一つの微細なる彈藥製造にも、多種の原料及び多數の器械を以て製造し得るを以て、海南島に藏せらるゝ資源を極力開發せば、これ等の不足を補ひ得る。鑛務上の必要品及び海軍に使用する火藥原料としてのグリセリンは、海南島に產出甚だ多く優に需要に供せられる。茲にその概要を述ぶれば次の如くである。所謂グリセリンを得やうとすれば、是非硬化油の工業に着目しなければならない。(一)吾人が日常用ふる固體脂肪牛油・豚油及び羊油等に依るもの、(二)液體油の原料をなす魚類・大豆・亞麻仁・綿花の種子等に依るもの、以上の各種動植物も亦海南島に甚だ多く、大豆及び綿花の種子は海南島に栽培せられる。亞麻仁は印度及びアフリカ洲に產するが、海南島も亦熱帶に屬してゐるから植ゑてもたやすく收獲が出來る。液體油を固體脂肪に變化せしむるには、化學の原理に依らなければならない。即ち化學成分に於いては水素を以てこれ

を飽和して固體となすので、水素が不足すれば液體となる。この理論に依り水素瓦斯を天然液體油内に加へると、硬化して硬化油となる。硬化油は蠟燭・洗濯石鹸・グリセリン食料品・毛織物用のアオリン油・人造バター等が製造せられる。平時は凡ての生活必需品は擧げて皆製造せられるのであつて、戰時はグリセリンを採取して爆發藥を造る。グリセリン工業と石鹸製造工業とは密接な關係がある。蓋しグリセリンは既に油脂の分解に依るもので、これは石鹸製造工業の副産物として製造すれば最も經濟である。油脂に苛性曹達を用ひて洗濯石鹸を製造するが如きは、その副産物中に於いて最も主要な製品にて、洗濯石鹸を製造してから後、その底の食鹽水内には、尙ほ濃度約百分の六を有する稀グリセリン液が溜る。この液は俗に洗濯石鹸鹵と稱するのである。若しこの液に砂糖汁を以て煑立てゝそれから眞空管に取つて熬煉すると卽ち濃度約百分の八十の粗製グリセリンが得られる。更に一、二回の蒸溜を加へると精良品になる。支那の石鹸製造工業の大多數は、小規模の家庭工業であつてグリセリンに未だ注目せず、多くはこの種の有用鹵液を棄てるが、當局は宜しく人民を奬勵して大規模の石鹸製造工場を組織し、眞空管を以てこの種の鹵液を集めて精煉することが急務である。尙ほ各小規模の家庭石鹸製造所を統制して、器具を設備しこれ等の鹵液を貯蓄せしめて、數日に一回人を使つて集め、大工場の眞空管に運んで精煉する。斯くせば原料を外國に求める必要もない譯である。その他各金・銀・マンガン鑛等の如きは海南島の開發に限らず、國内何處でも便利なところにあれば、先きにそれから採掘し、以て需要の求めに應ずべきである。只白金とニツケルとは未だ支那に産地を發見しないが、卽ち全國の十錢・二十錢の補助貨をニツケルで製造して、各省に流通せしめ、戰時は紙幣を以てこれと交換する。白金の一般私用を制限して結婚の時千圓以上の嫁入道具を有する者は、白金指環二個を購つて裝飾品とすれば自ら解決する。

第六章　黎人の開化

海南島の人口は約二百三十萬、黎人は約五分の一强を占むる。人民は能く苦勞に耐へるが冒險性を帶び、儋縣の住民は戰爭上手の名がある。漢民族は多く島の周圍に居住してゐるが、また南洋へ行つてゐるものも多く、毎年南洋より送つて來る金錢は莫大なもので、これ等の送金は實に海南島の市街を繁榮せしめるに足る。海南島は以前地方に事件が多かつた爲、官吏は各自の政治をなし、苛酷に雜稅を徵收し、變幻極まりなき狀態で住民は安住の地も得られず、危險を脫して外に走る者さへあり、遂にこの天然寶庫をして荒蕪の土地と化せしめてゐた。今や政治は已に軌道に乘り政府の命令は統一的となり、苛酷政治の存在を容れなくなつたので、開發の計畫が規定通り實行さるゝならば、四方の民衆は海南島に集り、將來人口は益々增加して百萬に達するは疑を容れないところである。蕃族は約五六十萬の多數に及び黎・苗・岐・侏の四族に分けられる。皆未開化で性質は强悍にして、僅かな事に相互に殘虐行爲をなし、また鬼神を迷信し、疾病に罹ると巫女を招聘し禽獸を殺して鬼を祭り、早く全快を祈るといふ迷信的風習がある。或は禁婆を殺し、病人は巫女を招聘して神を降らせ、若しも神が病人は人の邪術の暗害を受けてゐると言へば、巫女により指示を受けると云ひ全村の老幼婦人を召集し、邪術を施す者一人が指出されると、大衆の憤怒が發動して眞僞を問はず、この者を半死半生にまで毆り、二人で擔いで行つて生埋めとする。病人は絕對に醫藥を用ひず毎年死亡する病人は莫大である。また酒・煙草を好むが自ら製造することなく、多くは漢民族から供給を仰いでゐる。若し誰でも些少の酒・煙草を贈ると大變に喜ぶ。これ黎人の感情を柔げる最上の方法である。吾人は積極的に海南島を開發しやうとすれば、是非黎民の協力に賴らなければならない。黎民開化は實に當今の急務で、開化方法は宜しく黎民の興味方面から着手すべきである。その方法に就いて觀れば、相當の利益を彼に與へ、新式の畜牧業と耕作方法を指導して、

その生産量を增加せしめ缺乏には供給し、利益に喜悅せしめる一面、醫者を送り藥を施して、病人を治療しその死亡率を減少してその德に感謝せしめることは、堅く吾人を信じて疑はしめない。然る後に彼等の服裝を改良し、その風俗の惡風を改め、漢民族と接近すれば、必ず漢文支那語を識らなければ不便であることを自覺せしめ、喜んで學習するやうにし、多數の小學校を設けて黎民を教育する。斯くすれば黎民は喜んで施設に感服し、漢民族に歸化する。黎民と漢民族とは同民族であり、等しく支那の國民であつて、もとより區別する必要もなく、法律も亦當然平等にすべきである。

第七章　海南島と台灣との比較論

海南島も台灣も共に島國である。民國二十五年の海南島稅關報告に據れば、輸入品は一七、〇八一、五〇八元、輸出品は僅か五、七〇七、九九六元、輸入超過額一一、三七三、五一二元で貿易總額は二二、七八九、五〇四元に過ぎない。これを台灣と比較するに台灣は年輸出一億數千萬元の巨額で、豐作の年は二億元を超過してゐる。台灣が未だ日本の領土でなかつた前は、その生産量は海南島よりも少なかつたが、割讓して日本に歸してから後は、日本人の經營に依り今日の結果を見た譯である。海南島は台灣に勝る、その優點を次に擧げる。吾人が若しよく海南島經營に努力するならば、獲る所は台灣の數倍に達するであらう。（一）海南島の面積は台灣の面積より約四分の一大きい。（二）台灣は日本人の開發後四十年を經過し、あらゆる森林鑛産は已に十中の七八は消失してゐるが、海南島には千年の古木は無數にあり、地下の埋藏鑛物の採掘には完全に着手されてゐない。（三）台灣は常に水災に犯されるが海南島はこの患がない。（四）台灣の天氣は常に日夕共に暑く、身を避ける處がないが、海南島の太陽は炎暑と雖夕方は涼しい。（五）五指山の麓に國道を築いて交通路とすることが出來るが、台灣は峻岨で禿山で平坦なところがなくて交通路は敷設出來ない。（六）海南島に耕作し得る水田は百分の二十あるが、台灣は百分の十五のみ。（七）五指山河流は旋回してをり、河は各地方に流れて船舶の航行が出來、四百噸級の貨物船でも差支なく航行し得るが、台灣は僅かに島に沿つて航するのみ。（八）台灣は地震帶に近く常に地震に遇うて屢々莫大の損失を受けるが、海南島はこの患がない。（九）台灣の生蕃は時々出て來て犯罪を侵し、住民は爲に殺害を受け、商工業者等は破滅するが、海南島は安寧にして侵掠がない。（一〇）台灣に産する葉煙草・甘蔗等は悉く海南島にあるが、海南島の護謨・椰子等一切の熱帶植物は悉く台灣に産しない。（一一）台灣の蕃人は人を殺して手柄として感化され難いが、海南島の土人（黎・苗・俘・伐）は性質甚だ從順で、教育により吾人の指揮に從はしめることが出來る。

第八章　國民政府が爲すべき施設事項

（一）海南島を特別區と定め、總ての雜稅は一律に撤廢すること。稅金及び輸出稅は極力輕減して、人民の實業振興を奬勵し、將來生産の增加に依る收入の增加率に伴ひ、稅率を引上げるやうにするならば、人民も亦政府と共に利益を獲得することになる。

（二）嚴重に法律を以て積極的に農工業を保護する。

（三）凡て軍需工業と關係ある農産物と鑛産物を重要視して、その稅金及び運賃を特別に輕減し民衆の經營と協力すべきである。若し民間の經營困難の場合は政府は努めて援助する。

（四）工場の設立には、凡て軍需工業と關係ある工場・例へば染料工場・石鹼製造工場の如きは、戰時に爆發藥を製造せられ、玩具製造工場及び鐘表製造工場は、戰時に信管を製造せられ、機械製造工場は戰時に彈藥を製造せられ、護謨工場は防毒マスクを製造せられ、その他の工業でも戰時兵器製造の工場に變更せられるものは、政府は總て今より設計を立て、必要の時に資本を補助して軍事工場となすのである。平時はその稅金及び運賃を輕減して製品を全國に捌き販

路を廣めて繁昌せしめる。支那の如く武力を以て領土と主權を護らうとするには、即ち軍備を次第に擴大せねばならないのであつて、軍用品の補給には何處の國も困難を感じてゐるので、愼重に考慮して兵器及びその他の軍用品製造には皆工業技術に依らなければならない。支那の如く天賦の資源に富める國と雖も技術に依らなければまた自給しがたい。況んや工場の生産設備が急速に出來上るものでもなく、植物の生産量はまた一時に增加し得るものでもないに於いてをや。今より準備を怠らず非常時の需要に應ずべきである。支那の工場は現在多くは上海と天津にあつて、兩地とも海濱に接近してゐるので、戰時は敵軍の攻擊に依り破壞される憂があるから工場の位置は變更しなければならない。

(五)海南島と雷州半島に醫院を設けること。海南島と雷州とは土地が廣くて人口少く、初めて開墾に來た者は風土に慣れず、常に病氣に罹るので、政府は宜しく情況を斟酌して、病人の療養方法を講ずる爲に必要なる病院を設立し、病人を救濟すること。

(六)各縣の公共道路を完成すること。

(七)海南島語の通譯員を訓練すること。

(八)農業・漁業・鑛業・牧畜講習所及び工業講習所を設立して各種工作を指導すること。

(九)詳細なる開墾取扱手續を定め、椰子・護謨等の如き他所に栽培出來ない植物は、範圍を擴大することはよいが、その地域内には絶對に他の植物を植ゑないやうにして戰時の需要に準備すること。

(一〇)國營汽船會社・招商局の如きは毎月是海南本島へ數回航行しなければならないことゝ定めること。

(一一)海南島及び支那或は南洋行の汽船を奬勵し、また商人に創業を奬めるのである。これに依つて海南島は開發されるから生産は自ら多くなり、貨物・旅客の運輸は當然に支那の商船が負擔するので、國内經濟の發展ともなる。

(一二)水利局を設けて海南島の水源を改良し、而して農業に利用せしめて利益をはかること。

(一三)外人は常に漁船を利用して沿海一帶の地勢を撮影し、更に人を奥地深くへ入れて情況を偵察し、侵略の方策を講ずる爲に土人に利益を與へて、その道案内をさせるのである。宜しく各縣に命令して政府の許可を得なければ、外人遊行の道案内を禁止することゝし、これに反する者は處罰せられることゝ定むべきである。而し外國人が奥地に入る必要のある時は、人を派遣して保護及びこの行動を監視せしむべきである。

第九章　結　論

要するに今日海南島の地位の重要性は昔の比ではない。宋子文氏が海南島を視察して以後、全國人士の注意を惹起した。新海南島を建設しやうと思へば、先づ具體的計畫を樹て全島一切の狀況を明瞭にし、事物の輕重をはかつて漸次實施し、目標を定めて將來の方針に從ひ實行處置するのでなければならない。竝に特別機關を組織して行政を統一し、その成果を擧ぐべきである。嗚呼！滿洲は已に失ひ、白山黑水（長白山・黑龍江）已に吾人のものに非ず、今や海南島の得失は實に支那國生死の分岐點である。今日緊急計畫を樹てゝ實行しなければ、必ず後日悔を殘すところ大なるものがあるであらう。

第二編　海南島に關する文獻目錄

例　言

一、本稿は滿鐵上海事務所資料室の調査（徐炳南氏擔當）になり、この種文獻目錄が寡少であるので、參考に資する爲、特にこれを轉載收錄した。

二、海南島に關する文獻は從來餘り存在しない爲、その資料發見、目錄作成は容易でなかつた。

三、本目錄は滿鐵上海事務所資料室所藏の單行本竝に最近刊行の雜誌資料を檢出して作稿することに始つたが、作稿中他書に刊載された該島に關する貴重な文獻を發見したので、本稿の不完全を補ふ意味で、夫れを收錄し、紹介した。然してそれは、主に歐文と華文雜誌の資料である。

四、從つて本稿は左記の三部からなる。

(1)資料室所藏單行本

(2)雜　誌　資　料

(3)他書記載文獻

(A)雜誌『南支南洋』（十四年三月號）所載海南島文獻（華文）

(B)CORDIER『支那書誌』所載海南島文獻（歐文）

(C)丸善『學燈』（十四年三月號）所載海南島文獻（歐文）

(D)その他（歐文）

（一）單行書册

書名	編著者名又は發行所	發行年月
海南島志	陳銘樞編	民國二十二年一月
海南島志	南洋協會臺灣支部	昭和十二年一月
香港と海南島	東京朝日新聞社	昭和十四年一月
貿易奬勵資料第二十三輯—海南島の研究—	千葉燿胤著	昭和十四年二月
廣東省概說	臺灣總督府外事課	昭和十三年十二月
海南島現勢大觀	勝間田　善作	昭和十三年
南　海　島	南洋協會臺灣支部	昭和十四年二月
Hainan (The Island & The People)	上　海	一九三九年
海南島地誌（地理教育、支那研究號）	地理教育研究會	昭和十三年八月
支那省別全誌（廣東省）	東亞同文會編	大正六年四月
中國古今地名大辭典	上海商務印書館	民國十九年八月
中國商業政治地理大全	上海遠東地理學會	
海南島奥地旅行報告	臺灣總督府官房調査課	昭和九年七月
對華經濟資料　第五輯	日支問題研究會	昭和十二年十月
臺灣時報—海南島特輯號—	臺灣時報發行所	昭和十四年三月

海南縣志	桂站編	宣統二年
瓊州府志	張岳崧纂	道光二十一年
海南島旅行記	田署風	民國二十五年
海南島全貌	後藤元宏	昭和十四年三月

(二)雜誌所載資料

題名	雜誌名	刊行年月(卷號)
海南島占領と對外關係	外交時報	昭和十四年三月十五日
海南島の將來	北支那	昭和十二年五月(四卷五號)
海南島事情(瓊崖)	海外經濟事情	昭和十一年九月(一八號)
海南島の地理環境及其の產業概況	經濟週刊	民國二十六年六月(二二四號)
日本覬覦之海南島	東方雜誌	民國二十六年二月(三四卷四號)
海南島論	財政	昭和十三年十二月
海南島讀本	臺灣時報(第二八〇號)	昭和十三年十一月
最近の海南島經濟	臺灣時報(第二二七、八、九號)	昭和十三年十—十二月
從國防上觀察海南島	新中華	民國二十六年十月(五卷九號)
Hainan Island Development	Far Eastern Review	一九三七年八月(三三卷八號)
海南島の經濟的價値	南方情勢	昭和十二年七月
海南島事情	東亞	昭和十三年四、五月(十一卷四、五號)
海南島の產業	南支那及南洋情報	昭和十三年二月
海南島の農業	南支那及南洋情報	昭和十三年二月
海南島に於ける鑛業	南支南洋	昭和十三年十二月
海南島の鑛產	大亞細亞主義	昭和十三年十二月
海南島港灣開發論	港灣	昭和十四年一月(一七卷二號)
海南島水源林調査報告	南支南洋	昭和十三年十一—十二月(一六一、一六二號)
條約上より見たる海南島の地位	南支南洋	昭和十三年十一月
廣東と海南島	中央公論	昭和十三年十一月
海南島問題	大亞細亞主義	昭和十三年八月
海南島の展望と支那事變	臺灣、臨時情報部部報	昭和十三年二月
印度支那と海南島	大亞細亞主義	昭和十三年十二月
海南島事情	臺灣、臨時情報部部報	昭和十四年二月(五三號)
海南島と佛支秘密協定	大亞細亞主義	昭和十三年八月
海南島旅行記	南支及南洋情報	昭和十三年三—五月(八五、六、七號)
海南島の價値	南支南洋	昭和十四年三月(一六五號)
「海南島の國防地理」に關する華誌論調	南支南洋	昭和十四年三月(一六五號)
華誌に表はれたる「海南島の資源と開發問題」	南支南洋	昭和十四年三月(一六五號)

海南島小觀	南支南洋	昭和十四年三月（一六五號）	
海南島出身の南洋華僑	南支南洋	昭和十四年三月（一六五號）	
海南島の民族	臺灣時報	昭和十四年三月（海南島特輯號）	
海南島を繞る國際事情	同	同	
海南島外國貿易史	同	同	
海南島と倭寇	同	同	
海南島の地質と地壤	同	同	
海南島の植物資源	同	同	
海南島附近の漁場と漁業	同	同	
臺灣と海南島—明石總督海南島開發計畫—	同	昭和十四年四月（三二四號）	
海南島陷落と佛印の動向	東亞情報	昭和十四年四月	
海南島記	文藝春秋		

（三）他書記載文獻目錄

A 雜誌『南支南洋』掲載海南島文獻

（題名）	（筆者及雜誌名）
○海南島一般	
緩瓊論	金多翰
瓊崖存亡問題	林纘春
今日之瓊崖	林纘春
海南島	田中秀穗著
海南島	蔣瘦顛
瓊崖地位的過去現在與將來	陳獻榮
瓊崖一瞥	志堅
從臺灣說瓊崖	丁穎
崖縣社會概況	鄭庭杏
瓊崖考察經過	林纘春
瓊崖考察記	林纘春
現代瓊崖社會概況	黃有琚
海南島	陳獻榮
瓊崖考察一瞥（一）	馮華熙
瓊崖近況	林衡
海南島概觀	林朝傑
瓊崖的自衛和兵役	羅蓮峯
日本覬覦之海南島	方秋葦
各帝國主義覬覦下之海南島	陳獻榮

瓊農月刊一號	
瓊農月刊五號	
瓊農月刊二號	
史廷颺譯地學雜誌一年一期	
東方雜誌二一二卷十號	
東方雜誌三十一卷七號	
國聞週報三卷十二期	
瓊農月刊一號	
瓊農月刊一號	
瓊農月刊七、八號	
瓊農月刊自九至十八號	
瓊農月刊二、三號	
邊事研究自一卷五期—至二卷六期	
瓊農月刊三十九、四十號	
瓊農月刊三十九、四十號	
新生路月刊五、六期合刊	
新政週刊一卷三十八期	
東方雜誌三十四の四	
遠東雜誌二の一	

從國防上觀察海南島　方秋葦　新中華五の九
海南島與附近諸島之價值　綏成　青年週報二十
海南島和國際的關係　文　大地旬刊一の十
貢獻瓊崖富源於僑胞　黃建中　僑友創刊號
瓊崖國防之推進　道路月刊四十四の三

○經　濟

海南島經濟之現勢　張一凡　新亞細亞月刊六卷一期
瓊州商業概況　中行月刊七の四
瓊崖實業調查團工商調查第一次報告　蘇鼎新　瓊崖實業調查報告
發展國民經濟與開發瓊崖　宋子良　新生路月刊五、六期合刊
瓊崖商業與經濟　唐品三　新生路月刊五、六期
瓊崖救貧　朱鼎　新亞細亞月刊三卷六期、四卷一期
從經濟上國防上觀察海南島　潘雅　中國建設十五の五

○產　業

崖縣實業現狀　韓宋浩　瓊農月刊自六至八號
海南島實業一瞥　陳獻榮　中國實業雜誌一卷四期
開發瓊崖實業計畫　陳獻榮　新亞細亞月刊九卷四期
國人對于開發瓊崖應有之認識　黃強　新生路月刊五、六期
從瓊崖之行說到開發瓊崖　林纘春　瓊農月刊三十九、四十號

開發瓊崖之三種力量　中山日報
海南島之產業　商業月報
瓊島實業的現況與展望　雲昌熙
開發聲中之瓊島　祝世康
海南島開發之各方面　余煥庭
瓊崖開發與西南國防　張德俊

○農　業

瓊崖農業研究會及瓊崖農業的發展　麥冠華
崖縣的自然環境及其農業近況　張景
瓊崖西路農業狀況及經濟危機　麥冠華
瓊崖農村經濟衰落中應舉辦的幾件事業　王永銓
瓊崖幾種作物在中國的重要性　林纘春
新瓊崖建設的農業部門　雲惟揚
改良瓊崖農業的我見　鄭庭呆
開發瓊農瓊民密切之關係　洪運霖
瓊崖的農村經濟概況及其危機　邢詒江
改良崖縣農村的幾個問題　張景菁
瓊崖農村經濟崩潰中一小農村的實況　符必選
瓊崖的自然環境及其農業近況　張景菁

瓊農月刊三十九、四十號
戰時特刊六號十七の十二
邊事研究五の六
經世半月刊一の六
新中華五の九
邊事研究六の一
瓊農月刊四號
瓊農月刊二十、二十一號合刊
瓊農月刊二、三號
瓊農月刊十七期
瓊農月刊十五、六號合刊
瓊農月刊二號
瓊農月刊三號
瓊農月刊三號
新亞細亞月刊九卷六期
瓊農月刊二十二號
瓊農月刊一、二號
瓊農月刊二十、二十一號合刊

瓊崖之農產　彭程萬・殷汝驪　地學雜誌二十六年、七期
海南島農產業　平間愈三郎著　林纘春譯　瓊農十六、七號合刊
海南島農產業調查　平間愈三郎著　林纘春譯　瓊農自十八至二十二號
改進瓊崖農業芻言　王永銓　瓊農月刊十一號
海南島之農產食糧調查　林纘春　國際貿易導報八の六
瓊崖島五縣農藝調查報告　譚仲約　瓊崖實業調查團報告
瓊崖實業調查團農業組考察土壤水利情形報告　劉茂青・周炯輝　瓊崖實業調查團報告
海南島之農產食糧調查　統計月報二十七

○林業、牧畜、水產業、鑛業等

瓊崖之森林　彭程萬・殷汝驪　地學雜誌十一年十二期
瓊崖實業調查團森林調查報告　李覺　瓊崖實業調查團報告
瓊島森林概況及整理意見　陳世詠　瓊農月刊十七號
熱帶林在瓊崖之位置　陳世詠　瓊農月刊二號
談談瓊崖天然野生林之經營　李覺・陳時森　瓊農月刊五號
瓊崖水源林調查報告書　韓宗浩　廣東建設月刊一卷九期（農林專號下）
瓊崖樹膠園業調查　葉少傑　瓊農月刊十號
瓊崖樹膠之調查　羅清生・溫耀文　瓊農月刊三十九、四十號
瓊崖產牧獸調查報告　洪運霖　瓊崖實業調查團報告
瓊崖波羅咖啡園的攷察　瓊農月刊二十、二十一號合刊

瓊崖蠶絲業談　鄭庭杏　瓊農月刊二號
粵省瓊崖鹽業調查　工商半月刊五卷一期
瓊崖之鹽田　地學雜誌十二年八期
海南島漁鹽調查報告書　瓊崖實業調查團報告
附海南魚類目錄　鮑應中
附海南島全國
瓊崖鹽業調查報告　黃學賢　瓊農月刊二十、二十一號合刊
瓊崖之礦產　彭程萬・殷汝驪　地學雜誌十二年八期
本島（瓊崖）礦產調查　瓊農月刊十七期
海南島之鑛業　林纘春　邊事研究五の一
瓊崖錫鑛事業之展望　朱赤霓　廣東建設廳（鑛業專號）第二集
試探瓊崖昌江縣石錄山銅鑛報告書　方幹謙　廣東建設廳第二集
瓊州儋縣沙帽嶺一帶金屬鑛區略述　張君聲　廣東建設廳第二集
調查琼崖鑛產報告書　方幹謙　廣東建設廳第二集
瓊崖昌江縣亞玉山鐵鑛　方幹謙　廣東建設廳第二集
瓊崖各屬鑛產調查表　琼崖實業局　廣東建設廳第二集
儋縣第三區中間村牛路田林興公司開採錫鑛情形
儋縣第三區華乙田和興公司開採錫鑛情形
琼崖實業局組織章程、琼崖實業局辦事細則

瓊崖實業局兩年來辦理、鑛務概況告二十四、十附
瓊崖鑛業公司一覽表

○貿　易

瓊崖主要產品最近出口統計　彭程萬・殷汝驪
三年末瓊崖貿易概況及海口市面之觀察　林道謙

○交通、運輸

瓊崖交通之現狀　地學雜誌十一年自八至十期
瓊崖公路建設之概況　瓊崖實業調查團報告
瓊崖交通狀況　道路月刊二十五の一
海南島交通與出產概況　瓊農月刊二十二號
瓊崖公路建設概況　道路月刊五十二の一
瓊崖水運概況　廣東建設月刊一の十二航空專號
瓊崖航政與治河之關係　吳節性　廣東建設月刊一の十二
瓊崖航政今後發展之我見　吳節性　廣東建設月刊一の十二
瓊崖港務之近況　吳節性　廣東建設月刊一の十二
瓊崖港務局籌建海口港碼頭情景　廣東建設月刊一の十二
整理瓊崖航政港務農業建設分期進行計畫　廣東建設月刊一の十二

○民族、歷史、風俗、地理、旅行記等

瓊崖黎民之狀況及其風俗與教育　彭程萬・殷汝驪　地學雜誌十一年十一期
瓊崖黎峒狀況調查　地學雜誌十二年九、十期

瓊崖實業局以上廣東建設廳第二集所收
瓊崖海關監督公署報告瓊農月刊二十二號
中行月刊十三の四

瓊崖黎俗志略　李寶　國聞週報三ノ四十一、四十二期
瓊崖黎人社會概觀　王興瑞　瓊農月刊自九至十二號
談談海南島的黎民生活　培麗　瓊農月刊三十九、四十號
瓊崖黎人之概況　史地社會論文摘要二の三
瓊崖之居民　陳獻榮　新亞細亞十一の六
黎人風俗考　李旭華　河北博物院畫刊九十四、六、八期
瓊崖與移民　侯過　瓊農月刊六、七、八號
瓊崖之歷史　陳獻榮　新亞細亞十一の五
瓊崖重男輕女的風俗　大生　申報月刊四卷二號
瓊崖之地理　新亞細亞月刊十卷一期
瓊崖之國防地理　盧繼成　新生路月刊五、六期合刊
瓊崖調查記　懌盧　東方雜誌二十卷二十三號
調查瓊州消息　地學雜誌十一年六期
瓊遊筆記　夏壽華　船山學報自二至四期
游歷瓊州黎峒行程日記　光緒十三年（一八八七）自十月十一日至十一月二十二日胡傳虫貢半月刊二卷一期
海南島內地旅行報告書　陳世詠譯　瓊農月刊十三、十四號自二十至二十二號
環游海南島記　田曙嵐　旅行雜誌九卷自一至五號
海南生物科學採集團行程記　林文　方志月刊七卷四期
海南島踏查記（一）大光報　瓊農月刊三十九、四十號

海南島探檢記	邱懷瑾	邊事研究五卷一號	
海南黎人文身之研究	劉咸	民族學研究集刊第一集	
海南黎人刻木爲信之研究	劉咸	科學十九の二	
瓊州苗黎記	K T 作	社會月報一の七	
瓊崖教育調查記	陳獻榮	教育雜誌二十五の四	
瓊崖之黎苗生活	懷柔	社會新聞八の二	
○生物			
海南島內部鳥類新種七種之記載	任國榮	國立武漢大學理科季刊四卷四期	
海南島鳥類新種五種	任國榮譯	科學世界三卷五期	
瓊崖昆蟲調查報告	張進修	科學十七卷二期同瓊崖實業調查團報告	
海南島中人類寄生蟲及微蟲媒致病報告書		原報告者(Willem. Riley)瓊崖實業調查團報告	

B. CORDIER "支那書誌"所載海南島文獻

—La Mission de l'isle de Hainan. PP. 115-155.

—Journal of the Schooner Cuddalore on the Coast of Hainan 1760. By Alexander Dalrymple. Esq. London: Printed in the Year Mdccl XXI, in-4, PP 38.

—Jounal of a trip overland from Hainan to Canton in 1819, by J, R., The supercargo of the English ship "Friendship" Captain Ross. London, 1822, PP. 116.

—Tagebuch einet Landerise durch die Kustenprovinzen China's Von Mancha an der seekuste Von Hainan nach Canton.
In den J. 1819. U. 1820. Aus dem Engl. Von C. F. Lerdenfostz 1822.

—Tagebuch Einer in den Jahren 1819-1820 gemachten Fussreise Von manchao auf der Insel Hainan Nach Canton.-Aus dem Engl. (Aus dem Ethnogr Archiv) Gr. in-8. Jena, 1823. Bran. (Engelmann)

—Dagbok ofver en Resa till fots aren 1819 och 1820, fran Manchao, pa on Hainan, Canton. Ofuersattning. Stockholm, 1828, in-8, PP. 203.

—Notice sur L'ile de Hai-nan, Sur les religieux de la Mission de la Chine et sur Chinois. Par M. de la Roquette. (Bul. Soc. Geog. 1827)

—Description de L'isle de Hainan, extraite des auteurs Chinois; Par M. Klaproth. (Nouv. Aun. des Voy., VI, 1827. PP. 145-186, I Ca rte)

—Hainan (Chinese Rep. I, P. 151-152)

—The Island of Hainan (Singapore Chronicle, 3 March, 1825, reimp dans The Asiatic Journal, XX1, 1826, P. 15 Vcir A, J., L. C., P. 156)

—Chinese Commercial Guide, 1863: Kiung-Chau, PP. 181-182.

—The Aborigines of Hainan.—Articles dons notes & Queries on C. &. J., Vol 1 PP 83-84. Per. E. C. Boura, et Vol 11 PP. 17-19, by E. C. Tainter.

—Geographical sketch of the Island of Hainan (By E. C. Tainter, Canton, February 1868) br, in-4, PP 14, aves une carte.
Hainan, by E. c. Tainter (Notes & Q. on China & Japan-Reimp N. C. Herals. March 28, 1868.)
A Historical and Statistical Sketch of the Island of Hainan, by Wm Frederick Mayers, Esq., F. R. G. S., & C. H. B. M's Acting Consul at Chafoo. Read, October 13th 1871. (Journ. N. C. B. Roy. As, Soc., New

Commerce. Hongkong, Noronha & Son. 1878.

—Die Insel Hainan. Von Dr. Franz Ritter V Le Monnier. (Mit einer Korte.) (Deutsche Rund. f. Geog. U. Stat., VII, 1885, PP. 438-447)

—Lile D' Hainan. Apercu de Voyage (1896) Par M. C. Madrolle (Bul, Soc Geog Com. Paris XIX, 1897, PP 347-367.)

—Lile D' Hainan Par M. Cl. Madrolle. (Bul Soc. Geog., 2 trim, 1898, PP. 187-228, carte 1/450,000.)

—C. Madrolle.—Les Peuples et Les Langues de la China Meridionale.—Parlers de l'Ile d'Hai-Nan et de la presquile du Louitcheou (Louei-Tsiou) Survis de Quelaques expressions des peuples originaires des Regions Vorsins dei Tibet,-Carte de la China Meridionale.-Paris, Augustin Challamel, 1898, br, in-8. PP. 15, Carte 1/2,000,000

—Von Hongkong nach Hoi-How und der Yu-Lin Kan-Bai auf Hainan Aus dem Reisebericht S. M. S. "Irene" Kommandant Kapt. Z. S. Von Dresky (Aun der Hyd., XXIV, 1896, PP. 338-341.)

—Renseignement sur Hai-Nan Par. (Annales de Geog., V, 1899, PP. 271-277)

—A. H. Bach-Eine Reise durch Hainan. (Ostasiat Lloyd XIV, PP. 619-622, 624-645.)

—A Christandade de Hai-Nan e o antigo cemiterio Portuguez de Kium-Cheu-Padre Jose Vicente Costa (Ta-ssi-Yang-Kuo, ser. 1 Vol. 11, 1900-1 298-307.)

—Descriptions of seven New Species of Birds from the Interior of Hainan. By W. R. Ogilvie Grant. (1 bid 7 ser., V, 1899 PP. 584-587)

—Descriptions of New Coleoptera from Hainan Island, China By Chas. O. Water-hause. (Annals nat. History, 7 ser, V, 1900, PP. 310-312)

—On Some Longicorn Coleoptera from the Island of Hainan. By C. J, Gahan. (1 Bid., 7 ser., V, 1900, PP. 347-354)

—On a collection of Odonata (Dragonflies) from Hainan, collected. by John Whitehead, By W. F. Kriby. (1 Bid., 7 ser., V, 1906. PP. 530-539.)

—L'ile d'Hainan. Par C. R. (Rev francase, 1902. PP. 207-211.)

C. 丸善"GAKUTO"(學燈)(昭和14年3月號)所載海南島關係書誌

Bowra, E. C.—Hainan (China Review 11, PP 332-336)

Series, No VII, 1871 & 1872, art 1, P. 1)

—The aborigines of Hainan, by Robert Swinhoe, F. R. G. S., & C. H. B. M's Consul at Ningpo. Read March 25th, 1872 (Jour, N. C. B. Roy As. Soc., New Series, No, VII, 1871 & 1872, art 11, PP. 25'a 40.)

—Narrative of an Exploring Visit to Hainan, By Robert Swinhoe, Esq. F. R. G. S., H. B. M., Consul at Nigpo-Read May 13th, 1872. (1 bid., art 3., PP 41 a 91)

—Rapport de M. le Commondant ducouedic (Excursions et Reconnaissances, 1880, No 3. PP 309-314.)

—Land und Leute auf Hainan. Eine Schelderung der Insel und ihre Erzeugnisse Von J. G. Scott, Deutsch Von W. Rudow Ilfeld am Harz, Ch. Fulda, 1886.)

—Lile de Hainan (Rev, Mar, et col., Vol 80, 1884, PP. 234-242.)

—Hainan.—Fauna—Zoology. By E. H. Parker. (China Review. XIX, No. 6, PP. 369-376.)

—The Flora of Hainan. List of Plants Collected by Mr. E. H. Parker and identified by Mr. C. Ford (China Review XX, No 3. PP 167-168.)

—The Reptiles of Hainan. By E. H. Parker. (China Review, XX. No 3 168-172)

—The Aborigines of Hainan, By Frank P. Gilman. (China Review XXV. No. 5, PP. 247-251)

—The Li Aborigines of K'iung-Shan. By E. H. Parker. (China Review, XIX. No. 6 PP, 383-387)

—Lai Aborigines of Hainan and their Speech. By Carl C. Jeremiassen, (China Review, XX, No. 5. PP. 296-305.)

—Hainan, Lile de L'Exil. Par Carl C. Jeremiassen. (Le Globe Soc. G'eog. Geneve, Fev 1899, PP. 40-51)

—The Port of (Hai-Kon.) (China Review, 1. PP. 124-127)

—Topography of the Department of Chiung Chou Fu, or the Island of Hainan. (Ibid., 1. PP. 266-269.)

—Die Insel Hainan Nach Chas Ja-Kua. Von Professor Dr. Friedrich Hirth. (Bastian Festschrift. 1806, PP. 483-512.)

—Report on the newly-opened port of Kiung-Chow (Hoi-how) in Hainan and of Hai-phong in Tonquin. Visited in April, 1876. By N. B. Dennys, Ph. D., Secretary of the Hongkong General Chamber of

Yunnan. 1908. With map and (ills.)

Klproth. J —Carte de l'isle de Hainan Paris, 1827

—Description de l'isle de Hainan (Nouvaun de voyage VI.)

Madrolle, Cl.—Les Peuples et les langues de la Chine Meri-dionale. Parlers de l'ile d'Hai-nan et la presqu'ile du Louitchou (Louei-Tsiou). Suivis de Quelques.

Expressions des peuples orifinaires des regions Voisins du Tibet. Paris, 1808. 15P.

Mayers, W. F.—A Historical and Statistical Sketch of the Island of Hainan. (Journ. N. China Br. of Roy. Asiatic Soc VII. PP. 1-)

Nichols, John T. and Clifford H.Pope—The Fishes of Hainan. (A museum of Nat. Hist Bull. LIV Art. 2 PP. 321-349) New York, 1927.

Notice sur L'ile de Hai-Nan Hanoi, (1900) 20, et V. P.

Oshima, Masamitsu—Notes on a Collection of fishes Hainan obtained by Prof. S. F. Light (Annotations Zoological Japanese Vol XI. No. 1. PP 126.) Tokyo, 1926.

Rocher, E.—La Province Chinoise du Yun-Nan. 2 Vol. Avec Cartes 1879-80.

Ross, Capt.—Journal of a Trip Overland from Hainan to Canton in 1819, by J. R., The supercargo of the English ship "Friendship" London; 1922, PP 116 (Printed for Private Circulation.)

Savina.—Monographie des Hainan. Hanoi 1929.

Schmidt. K. P.—The Reptiles of Hainan (Bull. and Museum of Natural His Vol. IV) with illus. New York, 1927. PP. 71.

Scott, J. G.—Land und Leute auf Hainan. Eine Schilderung der Insel ihre Erzeugnisse. Deutsch Von W. Rudow. Inselund am Harz. 1886.

Smith, M. A.—On a collection of Reptiles and Batrachians from the Island of Hainan. With four (4) Figures, Bangkok, 1923. PP. 81

Stubel. H. U. P. Meriggi—Die Li-Stamme der Insel Hainan: Ein Beitray Zur Volksunde Sud-Chinas mit 260 teils farb.

Bragrad, Hans.—Alte Jesuitengraber auf Hainan (Mitt. Sem, f. Orient. Sprachen Ostas Stud. XX SS. 1-19) Berlin, 1917.

Dalrymle, alex.—Journal of the Schooner Cuddalore on the Coast of Hainan 1760. London, 1771, PP. 38

Dennys, N. B.—Report on the newly-opened ports of K'iun-Chow (Hoi-How) in Hainan and of Hai-Phong in Tonguin, Visited in April, 1876. Hongkong, 1878.

Dennys, M.—Bericht uber eine Reise in das Innere der Insel Hainan, Mit Karte. (Mitt. des semin f. Orieut Sprachen XI. Erst abt., SS 189-209) Berlin, 1908.

Henry, B. C.—Ling-Nam or interior Views of Southern China; incl. Explorations in the Hitherto Untraversed-Island of Hainan. London 1886. PP. 511.

Hirth, Friedrich—Die Insel Hainan Nach Ju-Kua. Berlin 1896. SS 30.

—The Pont of Hai-K'ou (Hainan). (China Review, 1. 1872-3. PP. 124-127)

—Topography of the Department of Ch'iungchou Fu on the Island of Hainan (China Review, 1, 1872-3. PP. 256-269.)

Hosie, A—Three Years in Western China: A Narrative of Three Journals in Ssu-Chuan, Kuei-Chow, and Yun-Nan. 2nd Ed. With additional notes in the preface, Exercises in Pho Language. With Map & Frantisp. 1897.

Insel.—Hainan (Die) (Mitt. KK. Seogr. Gesellschaft, Wien N. F. VI. Nr. 11 1873)

Madrolle, Claudius.—L'Empire de China: Hai. Nan et la Cotecontinentale Voisine. ire serie. 1900

—Hai-Nan. Le poys et ses habitants. paris. S. d. (1909) 26 P. et. Carte

—Hai-Nan et la cote Continentle Voisine. Avec Preface de R. de Marguerye. Avec 6 cartes, paris, 1900 XVI, XIV, XVIII, 126 P (325 copies limited edition)

Johnston, R. F—From Peking to Mandalay: A Journey from North China to Burma, through Tibetan Ssuch'uan and

Lab. Sci Soc. China, Vol. XII (Zool. Ser.), PP. 1-18, 1936.
Nie, Dashu, "Dinoflagellata of the Hainan Region-Ceratium," Contr. Biol. Lab. Sci. Soc. Ceina, Vol. XII (Zool Ser.) PP. 29-73, 1936.
Chen Y., "Oligochaeta from Hainan, Kuangtung," Contr. Biol. Lab. Sic. Soc. China, Vol. XII (Zool. Ser.), PP. 375-427, 1938.
Bowra, "Phe Aborigines of Hainan "Noten, and Queries on China and Japan, Tome 1, PP. 84-84.
Tainter, E. C., "The Aborigines of Hainan, "Ibid. Tome 2, PP. 17-19.
De la Roquette, "Note sur I'lle de Hainan," Bull, Soc. Geogr., VII, PP., 211-222, Paris, 1827.
Taintor, E. C., "Geographical Sketch of the Island of Hinan," 14 PP., 1 map. Canton, 1868.
Swinhoe, R., "Narrative of an Exploring Visit to Hainan." Journ. Roy, Asiat. Soc. (N. C. B.), PP. 41-62, 63-91, 1872.
Madrolle, C., "L'ile de Hainan, "Bull. Soc. Geogr. Commerciale tome XIX, No. 5, Paris, 1897; tome XX, No. 7, Paris, 1898.
Moninger, M. M., "The Isle of Palms," PP. IX 141, 1919. (Published by the American Presbyterian Mission, Island of Hainan)
Lee, C. S., "A Preliminary Report on the Geology and Mineral Resourees of the Northern Part of the Island of Hainan of Kuangtung," Ann Rept. Geol.surv. K. K., Vol. 2, Pt. 1, PP. 61-93 (In Chinese), 1928-1929
Pope, C. H., "Hainan," Nat. History Vol. XXIV, PP. 215-223.
Mell, R., "Uber Floristiche-faunisrische Formationen in sudchina mit bes. Berucksichitigung d. Ornis, "Joum f. Ornitbol. Band LXXI, Hef 4, S. 381-398, 1923; Heft 3, S. 273-314, 1924; Heft I, S. 16-193, 1925.
Mc Clure, F. A., "Some Observations of a Plant Collector on the Island of Hainan," Ohio Journ Sci., Vol. XXV PP. 114- 118, 1925.
..... "Observations of a plant Collector in Hainan," Lingnan Sci. Journ Vol. 1. No. 1, 27 PP., 1923.
Swinhoe, R., "The Aborigines of Hainan," Jaurn. Roy. Asiat Soc. (N. C. B.), PP. 25-40, Shanghai, 1873.
Calder J., "Notes on Hainan and its Aborigines, "China Rev., PP. 42-50 1882.
Gilman, F., "The Languages and Dialectes of Northern and Western Hainan," China Rev., Vol. XX, P. 128, 1892-93.

abb. auf Tafeln, 12 Sprachtabellen u einer Ubersichtsharte. Berlin, 1937. SS. V 338.
Swinhoe, Robert.—The aborigines of Hainan. Shanghai, 1872. PP. 16.
—Narrative of an Exploting Visit to Hainan (Journ. of N. Cnina Br. of Royal Asiatie Soc. New Ser Vol, VII, Art, iii PP. 41—91)
Swinhoe, Robert—The Natural History of Hainan. London, 1870. PP. 20.
Taintor, E. C.—Geographical sketch of the Island of Hainan With 1 map. Canton, 1868. PP. 14.
—Hainan (Customs Trade Reports). 1867.
Ueber die Insel Hainan (Hydr. mitt 1873 Nr. 20).

D' その他(歐文)

Du Halde Pere J. B., "Description de L'Empire de la Chine et de la Tartarie Chinoise" Kiun Tcheou (Hainan) described in Tome I, PP. 230-233, Paris, 1785.
Purefoy, Capt, "Diary of a Jouney from Man-Chao (Wan-ning) on the South Coast of Hainan to Canton in the Years of 1804 and 1805, "Asiatic Journ-Month, Regist. Brit. India, Vol. XX, PP. 512-528, 621-628, London, 1825.
Klaproth, H. J., "Description de I'lsle de Hainan, "Anndes Coyages, Tome VI, PP. 145-168, 1872, with one map in English translation.
Merrill, E. D., "An Enumeration of Hainan Plants," Lingnan Sci. Journ., Vol., V, PP.1-166, 1927
.....and Chun, W. Y., "Additions to our Knowledge of the Hainan Flona-1," Sunyatsema, Vol.1, PP. 23-48, 1934.
.....and....." Additions to our Knowledge of the Hainan Flora 11, Sunyatsema, Vol. 11. PP. 203-332, 1935.
Parker, H. E., "Reptiles of Hainan," China Rew., PP. 168-172. 1892-3.
Wu, H, W. and Tang, S. F., "Notes on the Fishes of Hetherosomata from Hainan," Simensia, Vol. VI, No. 3, PP. 391-7, 1935.
Tchang, Tchung-lin, "The Fishes pf Hainan." Bull. Fan Mem. Inst. Biol., Vol. VII, (Zoology), PP. 99-110, 1937.
Wang, King F., "Notes on Mulloid Fishes from Hainan," Conter. Biol.

Jeremiassen, C. C., "The Loi Aborigines of Hainan," China Rev., Vol. XX, PP. 296-305, 1892-93.

Henry, B.C., "Lingnam, or Interior Views of Southern China, including explorations in the hitherto untraced Island of Hainan," London, 1886. (PP. 326-511, on Hainan.)

Hirth, F., "Die Insel Hainan nach Chau Ju-Kua," Bastian-Festscbrift, PP. 485-512, 1896.

Madrolle, C., "Les peuples et les langues de la Chine meridionale," Paris, 1898.

Schagfer, K. L., "The Lois, "East Asia' 1904.

Strzoda, W., "Die Li anf Hainan," Zeit. F. Etbnol., Ed. 43, S. 193-236, 1911.

Moninger, M. M., "The Miao of Hainan," Journ. Rev. Asiat. Soc. (N. C. B.), Vol. LVII, PP. 40-50 1921.

Buschan, G., "Illustriette Volkerkunde," Bd. 11, S. 643-5, Stuttgart, 1923.

編譯彙報 既刊目次

第一編 全國經濟委員會工作報告 昭和十五年一月
第二編 四川攷察報告書 同 二月
第三編 全國經濟委員會會議紀要(第五集) 同 二月
第四編 全國經濟委員會會議紀要(第三集) 同 二月
第五編 全國經濟委員會關係法令集 同 二月
第六編 全經委棉業統制委員會三年來工作報告 同 二月
第七編 全國經濟委員會會議紀要(第一集) 同 三月
第八編 全國經濟委員會會議紀要(第四集) 同 三月
第九編 全國經濟委員會會議紀要(第二集) 同 三月
第十編 製紙工場創立計畫案 同 三月
第十一編 機械工業報告書 同 三月
第十二編 紡績工場移轉計畫案 同 三月
第十三編 江蘇省句容縣人口農業調查報告 同 三月
第十四編 淮史述要 同 三月
第十五編 河南省の棉業 同 三月
第十六編 四川省石油調查報告 同 三月
第十七編 合作事業工作概況 同 三月
第十八編 國民政府內外債整理委員會報告書 同 四月
第十九編 人造絹糸工業報告書 同 五月
第二十編 全國經濟委員會會議紀要(第六集) 同 五月
第二十一編 護謨工業報告書 同 六月
第二十二編 電氣用具工業報告書 昭和十五年六月
第二十三編 製紙工業報告書 同 七月
第二十四編 燐寸工業報告書 同 七月
第二十五編 浙江省產業事情 同 七月
第二十六編 廣東經濟調查報告 同 七月
第二十七編 中國戰時經濟論 同 七月
第二十八編 建設委員會工作計畫概要 同 七月

三9M17

昭和十五年八月三十日印刷
昭和十五年九月十日發行（非賣品）

著作兼發行人　南京成賢街五四號　大塚令三

印刷人　上海大連灣路一三〇號　松尾金治

印刷所　上海大連灣路一三〇號　華中印書局股份有限公司

發行所　南京成賢街五四號　中支建設資料整備事務所編譯部